速報版

日本・中国・インドネシア・フィンランド

幼児期の家庭教育国際調査

4か国の保護者を対象に

ベネッセ教育総合研究所では、2017年、社会文化的な背景が異なる4か国の都市部で、幼児期の子どもをもつ保護者に調査を実施し、合計約4,900名の回答を得ました。この調査は、各国における幼児期の「学びに向かう力（非認知的スキル）」の実態や、保護者の家庭教育・子育てについての意識・かかわりについて明らかにすることを目的にしています。その中から、注目したいデータをご紹介します。

ベネッセ教育総合研究所

調査について

背景と目的

グローバル化やIT化など国際的に社会環境の変化が加速する中で、既存の知識を身につけるだけでなく、環境に柔軟に適応し、学び続け、課題を解決しようとする姿勢や力が必要と考えられるようになっています。そして、そのような姿勢や力を幼児期からはぐくむことの重要性が、世界的に注目されています。ベネッセ教育総合研究所では、この姿勢や力を《学びに向かう力(非認知的スキル)》として、年少期から毎年、国内で縦断調査を行ってきました。その中で、《学びに向かう力》の形成のプロセスと、《生活習慣》や《文字・数・思考(認知的スキル)》との相互影響の様子、保護者のかかわりの影響について明らかにしてきました(「幼児期から小学生の家庭教育調査」2012年から実施)。

この度、研究対象を国外に広げ、社会文化的に異なる環境に暮らす幼児の《学びに向かう力》《生活習慣》《文字・数・思考》の発達状況と保護者のかかわりを把握することを目的に、日本・中国・インドネシア・フィンランドの都市部で調査を行いました。幼児期の家庭教育の実態や、保護者の意識も合わせて調査し、背景となる環境や意識の違いや共通点を明らかにしました。

調査概要

調査対象	4歳～6歳(就学前)の幼児を持つ母親			
調査項目	子どもの基本的な生活時間／メディアとのかかわり／習い事／母親の教育観・子育て観／子どもの将来への期待／生活習慣・学びに向かう力(非認知的スキル)・文字・数・思考(認知的スキル)／母親の養育態度・行動／教育・しつけの情報源／子育ての担い手／父親・祖父母の家事・育児参加／子どもと過ごす時間など。			
調査国	日本	中国	インドネシア	フィンランド
調査地域	首都圏 (東京駅から40キロ圏内)	北京市・上海市・成都市	ジャカルタ市 他近郊4市	エスポー市 他3市
調査時期	2017年3月	2017年6月	2017年5～7月	2017年6～7月
調査方法	インターネット調査	幼児園通しの 自記式質問紙調査	調査員の戸別訪問による 聞き取り調査	保育園通しで配信された インターネット調査
有効回答数	1,086名	2,778名	900名	180名

※ サンプリングは有意抽出のため、厳密には、地域を代表するデータにはなっていないことに留意が必要である
※ 中国は、各都市の2等級～示範級の幼児園から対象園を選定した
※ インドネシアは、調査員が戸別訪問し、経済階級を把握するための質問をした上、ミドルクラス以上と判定された家庭に対して調査を実施した
※ フィンランドは、調査協力に同意した自治体の保育園を通して、通園する家庭に向けて調査協力依頼のメールを配信し、回答用URLから、保護者が回答した
※ 各国の小学校入学月の1～3ヶ月前に時期を合わせて調査を行った

データに関する留意点

- 図表・文中では、国名を記載していますが、調査は各国の都市圏で実施しており、調査国全体の平均値を示すものではないことにご留意ください。
- 中国、インドネシア、フィンランドは、地域性やサンプリングの影響で、世帯収入と母親の学歴が平均より高い傾向があります。
- 中国については、自記式質問紙調査のため「無答不明」が生じていますが、分析に当たっては、各国と同じ条件で比較するために、設問ごとに「無答不明」を欠損値として除外して算出しています。
- 本報告書で使用している百分比(%)は、各項目の算出方法に沿って出した値の小数点第2位を四捨五入して表示しています。その結果、数値の和が100にならない場合があります。
- (　)内はサンプル数を示しています。

各国の就学前の保育・教育の状況

日　本

日本の就学前機関には、幼稚園、保育所、認定こども園等がある。幼稚園は３歳から、保育所は０歳から、認定こども園は０歳からを対象にしている（ただし、園により異なる）。国が定める保育・幼児教育のガイドラインには、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領があり、2017年に改訂された。この改訂では、幼児期にはぐくみたい資質・能力として、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」が示されている。「学びに向かう力、人間性等」は非認知的スキルを含むものである。日本全国での就園率は、幼稚園（３～５歳児）41.4%、保育園（３～５歳児）49.3%である（2017年）。[1] ４月１日までに満６歳になった子どもは、その年の４月１日から小学校に入学する。

中　国

中国における就学前機関は、主として託児所、幼児園である。託児所は０歳～３歳未満の乳幼児を対象とする保育機関、幼児園は３歳～６歳未満を対象とする教育機関である。幼児園は、公立と私立があり、毎年、園の運営や教育状況の監査が行われ、示範級～３等級まで４階級に認定される。近年、幼児教育において、非認知的スキルの育成も重要視されるようになり、教育部では、2012年９月に「3歳～６歳児童の学習と発達ガイドライン」が出された。「2016年全国教育事業発展統計公報」（中国大陸）によると、就学前教育において、中国全土での粗就園率[2]は77.4%である（2016年）。[3] 小学校への入学は、９月１日からで、８月31日までに満６歳になっている子どもが入学対象となる。

インドネシア

インドネシアにおける就学前教育は、幼稚園（「普通幼稚園」と「イスラム教幼稚園」）またそれと同等とされる諸機関によるフォーマルな教育と、「プレイグループ」、「チャイルド・デイケア・センター」、またはそれと同等とされる諸機関によるノンフォーマルな教育がある。[4] 幼稚園は２学年制である。幼稚園のカリキュラムでは、発達段階に基づき、①道徳、宗教的価値、②社会性・感受性・自主性、③言語能力、④認識能力、⑤身体能力、⑥芸術性を成長させることが目指されている。非認知的スキルは、教育計画や評価基準の中に、融合的に取り入れられている。就園率（3歳～6歳）は68%である（2014年）[5]。
小学校への入学は、７月第３週からで、同年７月１日までに満６歳になっている子どもが入学対象となる。

フィンランド

フィンランドでは幼稚園と保育園のような区別はなく、施設の場合は主に保育園という枠組みになる。対象年齢は生後10か月から６歳であり、小学校入学の前の年の１月～ 12月の間に６歳になる子は「プリスクール（エシコウル）」と呼ばれる就学前教育（2015年８月より義務化され、週20時間で無料）に通う。2013年より、保育園は幼児教育として社会保健省から教育文化省の管轄へと移行し、2017年秋からは初めてナショナルカリキュラムが導入され、幼児教育の内容の充実と平均化が図られることとなった。2016年の統計によるとおよそ68%の１～６歳児が幼児教育を受けている[6]。小学校への入学は１月１日から12月31日までの間に満７歳になる子どもが対象で、８月に新学期が始まるため、まだ６歳の子とすでに７歳になっている子が混在してスタートする。

【引用文献・注】
1 文部科学省「学校基本調査」．厚生労働省「保育所等関連情報とりまとめ」
2 粗就園率とは、制度上の就園年齢（３歳～６歳未満児）人口と、幼児教育機関の全就園者（実態として親の選択でインフォーマルに就学を１年遅らせている児童、３歳未満児なども含みうる）との比率である。
3 中国教育部（教育省）．「2016 年全国教育事業発展統計公報」 http://www.moe.gov.cn/jyb_sjzl/sjzl_fztjgb/201707/t20170710_309042.html
4 服部美奈（2006）「第８章 インドネシア 道徳的価値と知識習得の調和を目指して」池田充裕・山田千明（編著）『アジアの就学前教育―幼児教育の制度・カリキュラム・実践―』明石書店
5 Kemendikbud (2015)『Rencana Strategis Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan 2015-2019』(https://luk.staff.ugm.ac.id/atur/RenstraKemdikbud2015-2019.pdf)
6 国立健康福祉研究所（THL）統計報告 29/2017 幼児教育 2016 年より http://www.julkari.fi/bitstream/handle/10024/135183/Tr29_17_vuositilasto.pdf?sequence=5

基本属性

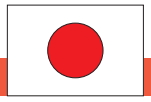
子どもの年齢・性別

(%)

	4歳	5歳	6歳
日本(1,086)	33.3	33.3	33.3
中国(2,778)	38.9	37.3	23.8
インドネシア(900)	33.3	33.3	33.3
フィンランド(180)	38.9	33.3	27.8

(%)

	男児	女児
日本(1,086)	53.5	46.5
中国(2,778)	52.9	47.1
インドネシア(900)	50.0	50.0
フィンランド(180)	50.0	50.0



日本

調査地域：首都圏（東京駅から40km圏内の市区町村）

母親

1．年齢：20代以下9.5%　30代65.2%　40代以上25.3%

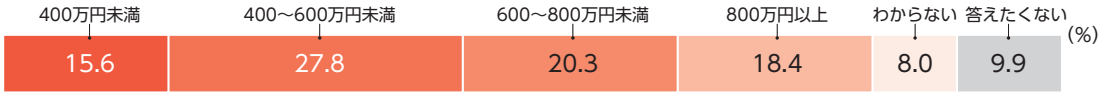
2．学歴：四年制大学卒以上39.9%

3．就業状況：有職34.3%（内、常勤（フルタイム）比率16.1%）、無職62.2%

世帯

4．配偶状況：有配偶95.6%

5．世帯収入（税込年収）



こども

6．就園状況

中国

調査地域：上海市（34.1%）・北京市（39.5%）・成都市（26.3%）

母親

1．年齢：20代以下4.6%　30代83.0%　40代以上12.4%

※母親の年齢は無答不明が23.3%あるが、集計から除外している。

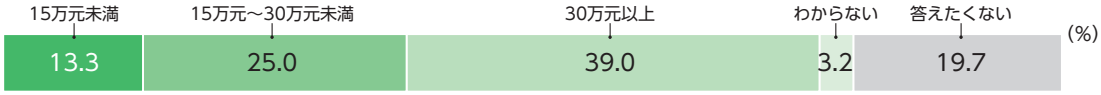
2．学歴：四年制大学卒以上74.3%

3．就業状況：有職90.0%（内、常勤（フルタイム）比率70.3%）、無職6.9%

世帯

4．配偶状況：有配偶98.8%

5．世帯収入（税込年収）



こども

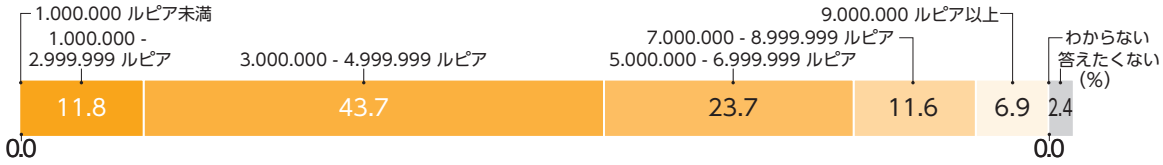
6．就園状況　幼児園　100%　※幼児園通しの調査のため。

インドネシア

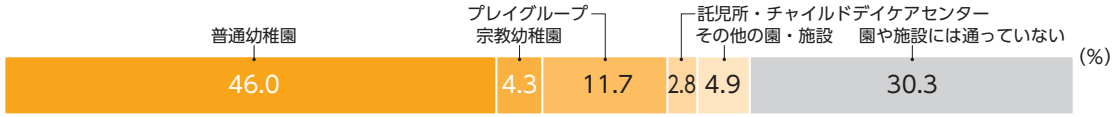
調査地域：Jakarta（42.3%）・Tangerang（14.6%）・Depok（15.1%）・Bekasi（13.8%）・Bogor（14.3%）

母親
1. 年齢：20代以下28.7%　30代57.2%　40代以上14.1%
2. 学歴：四年制大学卒以上6.3%
3. 就業状況：有職19.2%（内、常勤（フルタイム）比率5.9%）、無職78.7%

世帯
4. 配偶状況：有配偶97.7%
5. 世帯収入（税込月収）



こども
6. 就園状況



フィンランド

調査地域：Espoo（51.1%）・Kouvola（24.4%）・Seinäjoki（14.4%）・Lappeenranta（10.0%）

母親
1. 年齢：20代以下7.2%　30代68.3%　40代以上24.5%
2. 学歴：四年制大学卒レベル以上71.1%
3. 就業状況：有職84.5%（内、常勤（フルタイム）比率75.0%）、無職5.6%

世帯
4. 配偶状況：有配偶88.3%
5. 世帯収入（税込年収）

こども
6. 就園状況

各国の子どもの生活・母親の子育て意識サマリー

日本（首都圏）

●子どもの生活：

平日は７時頃に起床する子どもが４割台、21時頃に就寝する子どもが３割強でもっとも多い。園で過ごす時間は、幼稚園児が多いデータのため全体では「５時間ぐらい」が約４割であるが、幼稚園児と保育園児で、在園時間は異なり、幼稚園児は「５時間ぐらい」、保育園児は「８～９時間ぐらい」が多い。絵本、テレビ、ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダーの普及はいずれもほぼ100％で、「週に３日以上」使用している比率が５割以上。７割弱が習い事をしており、スイミング、体操などのスポーツ系の習い事が上位２位である。

●母親の子育て意識：

子育てにおいては、自立、生活習慣、協調性、自己主張を重視している。子どもの進学期待は、四年制大学卒業までがもっとも多い。子どもの将来には、「自分の考えをしっかりもつ人」「他人に迷惑をかけない人」と願う比率が、他国に比べて高い。母親にとっての子どもの存在は、「生活や人生を豊かにしてくれる存在」が66.6％でもっとも高い。「配偶者・パートナーとの関係をつないでくれる存在」の選択率が他国に比べて高く、「将来の社会を担う存在」の選択率が他国に比べて低いことが特徴である。子育てと自分の生き方のどちらを重視するか、という二択の問いについては、他国に比べて、顕著に差がつかず、二極に分かれた。

インドネシア（ジャカルタ他）

●子どもの生活：

起床は、４か国の中でもっとも早く、４割強が６時頃までに起床する。南国であるため、気温の低い午前中の時間帯に行動することが多いことや、イスラム教の場合は早朝に礼拝があることなどで、子どもの起床が早くなっていると考えられる。幼稚園の教育課程は午前中で終わるので、在園時間は短く、４時間未満が約９割を占める。４か国の中で、絵本や知育玩具の普及率がもっとも低く、絵本は２割、知育玩具は約５割が家にない。絵本の使用頻度は、４か国のなかでもっとも低く、週３日以上使用する比率は全体の２割強（他国は５割～７割）。一方、スマートフォンの使用頻度は、４か国の中でもっとも高く、週３日以上が６割強（他国は１割～２割）。習い事をする比率は４割強で、４か国の中ではもっとも低い。「コーランの読み書き」は４割弱が習っている。

●母親の子育て意識：

子どもに対する期待は「自分の家族を大切にする人」（75.8％）、「リーダーシップのある人」（53.1％）と願う比率が高い。子どもの存在は、「先祖や家を受け継いでくれる存在」（64.3％）、「将来、自分の面倒をみてくれる存在」（57.9％）が高く、家族意識・家系継承意識が他国に比べて顕著に高い。子どもの進学期待が高く、約９割の母親は子どもに大学または大学院までの進学を希望している。子育てと自分の生き方のどちらを重視するかでは、「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」（翻訳上では、「自分のことよりも子どもを優先する」という、より柔らかいニュアンスで訳された）を９割強が選んでいる。

中国（上海・北京・成都）

●子どもの生活：

４か国の中では、中国の子どもがもっとも遅寝、遅起きの傾向がみられる（平均で７時12分頃起床、21時41分頃就寝）。子どもが習い事に通う比率が９割と４か国の中でもっとも高く、習い事の内容も、スポーツ系、芸術系、学習系と多様である。もっとも多いのが「英会話などの語学の教室」で５割強が通っている。

●母親の子育て意識：

子どもの存在は、「自分とは独立した人格をもつ存在」が81.4％でもっとも高い。子育てにおいて、「外国語を学ぶこと」「芸術的な才能を伸ばすこと」「自然とたくさんふれあうこと」を他国と比べてより重視している傾向がある。子どもの進学期待が４か国のなかでもっとも高く、６割が「大学院卒」を期待している。子育てと自分の生き方のどちらを重視するかでは、８割弱が「子育ても大事だが、自分の生き方を大切にしたい」と回答しているが、一方、「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいたほうがいい」を８割強が選択、アンビバレントな思いがうかがわれる。

フィンランド（エスポー他）

●子どもの生活：

平日は、４割強が７時頃に起床し、保育園で８時間程度過ごし、20時～21時ごろに就寝する子どもが平均的である。フィンランドでは、平日と休日で生活時間はあまり変わらない（フィンランド調査監修者より）。絵本や図鑑、知育玩具は、９割以上の家庭に普及している。絵本とタブレット端末について、「週３日以上」使用する比率は、それぞれ77.2％、46.6％で、４か国の中でもっとも高い。中国についで、習い事をしている比率が高く、８割弱。スイミング、サッカー、音楽教室などのスポーツ系・芸術系の習い事が多い。

●母親の子育て意識：

子育てでは、「他者への思いやりをもつこと」「社会のルールやマナーを身につけること」を重視している。子どもには、将来、「自分の家族を大切にする人」になってほしいと８割強が回答している。子どもの存在は、ほぼ全員が「生活や人生を豊かにしてくれる存在」と回答している。ついで、「自分とは独立した人格をもつ存在」（66.7％）ととらえている。子育てと自分の生き方のどちらを重視するかを問う設問では「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」「母親がいつも一緒でなくても、愛をもって育てればよい」を８割強が選択している。

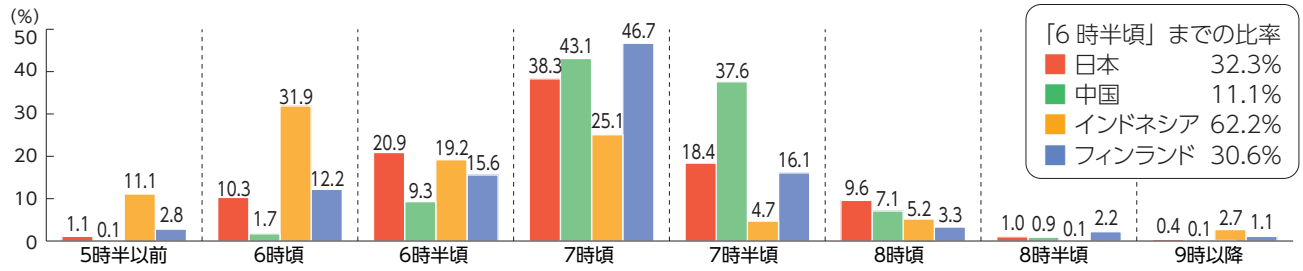
1 幼児の生活

1-1 生活時間

平日、もっとも早く起きるのはインドネシアの子どもである。62.2%が「6時半頃」までに起きている。中国の子どもは寝る時間、起きる時間が4か国の中でもっとも遅く、遅寝遅起きの傾向がみられる。

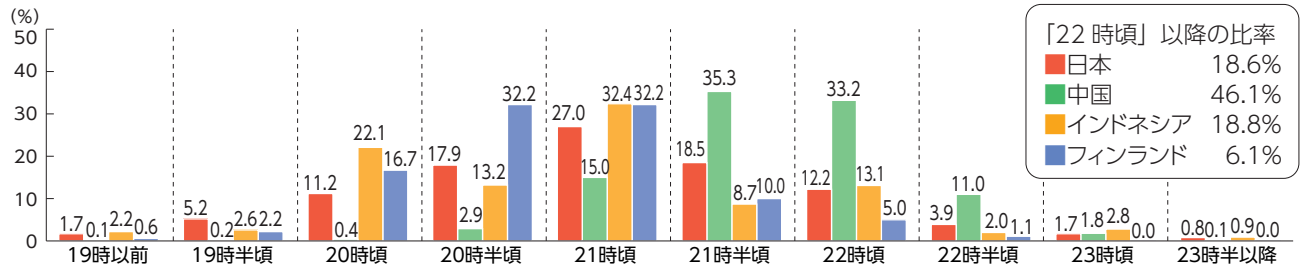
Q 対象のお子様は、平日、何時頃に起きますか。

図1−1−1　平日の起床時刻



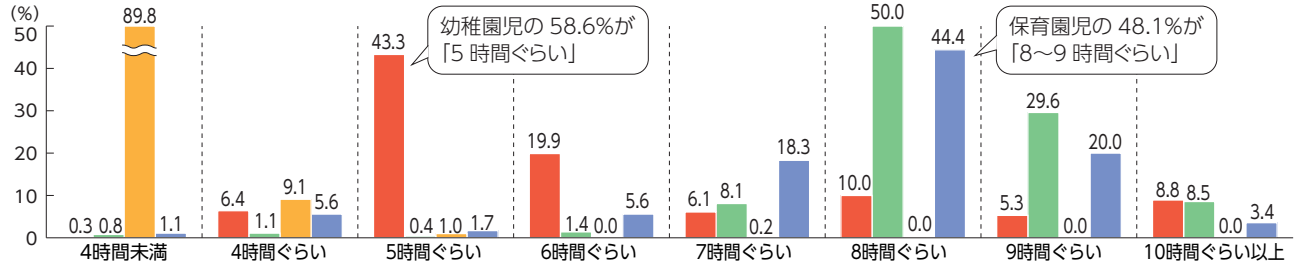
Q 対象のお子様は、平日、何時頃に寝ますか。

図1−1−2　平日の就寝時刻



Q 対象のお子様は、1日のうち、どれくらいの時間を幼稚園・保育園などで過ごしますか。

図1−1−3　園で過ごす時間



※　就園者の母親のみ回答
※　インドネシアは「3時間未満」(37.0%)と「3時間ぐらい」(52.8%)を「4時間未満」とした。「8時間ぐらい」以上は0%だった
※　「10時間ぐらい以上」は「10時間ぐらい」+「11時間ぐらい」+「12時間以上」の%

平日、「6時半頃」までに起きる比率は、インドネシアが62.2%ともっとも高く、次いで日本32.3%、フィンランド30.6%、中国はもっとも低く11.1%である(図1-1-1)。インドネシアの子どもが早起きなのは、イスラム教徒の場合は日の出前に礼拝する習慣をもつ親の生活や南国の気候の影響を受けていると考えられる。また、「22時頃」以降に寝る比率は、中国の子どもが46.1%ともっとも高く、次いでインドネシア18.8%、日本18.6%、フィンランドはもっとも低く6.1%である(図1-1-2)。中国は、他の国と比べると、遅寝遅起きの傾向がみられる。園で過ごす時間は、インドネシアでは、「4時間未満」が89.8%ともっとも短い(図1-1-3)。一方、中国の子どもの88.1%は「8時間ぐらい」以上を園で過ごす。日本では「5時間ぐらい」と「6時間ぐらい」が多く、合わせて63.2%となる。子どもが園で過ごす時間は、国によって大きく異なる。

1-2 家にあるもの・幼児の使用（視聴）頻度

テレビの視聴頻度は、中国以外で９割を超えている（週３日以上）。絵本は日本、中国、フィンランドで５割以上、スマートフォンはインドネシアで６割と他の国と比べて高い。

Q ご家庭にあるものについておききします。
お子様は次のものをどれくらい使ったり、読んだりしますか。

表1−2−1　家にあるもの

（%）

		日本	中国	インドネシア	フィンランド
絵本	週に３日以上	57.2 ②	66.1 ①	22.3	77.2 ②
	家にない	1.1	0.3	20.9	0.0
ワーク（お子様向けの「ワーク」や「学習用ドリル」など）	週に３日以上	31.7	27.4	38.7 ③	28.4
	家にない	10.5	12.6	17.1	0.0
図鑑（お子様向け）	週に３日以上	13.1	17.1	24.0	15.6
	家にない	27.4	11.7	24.1	3.3
知育玩具（つみ木、ブロックなど）	週に３日以上	41.6	47.5 ③	10.8	46.7 ③
	家にない	2.4	0.1	51.2	2.2
テレビ	週に３日以上	93.3 ①	57.4 ②	96.3 ①	90.0 ①
	家にない	0.5	1.7	0.7	2.8
ビデオ・ＤＶＤ・ハードディスクレコーダー	週に３日以上	51.2 ③	6.7	38.4	33.9
	家にない	2.9	35.2	25.0	8.3
スマートフォン	週に３日以上	20.1	19.2	63.7 ②	29.4
	家にない	5.1	1.8	12.9	1.7
タブレット端末	週に３日以上	15.4	21.5	27.3	46.6
	家にない	49.0	7.6	57.7	10.6
テレビゲーム	週に３日以上	3.6	2.4	4.0	6.1
	家にない	54.3	41.3	90.0	33.3
学習用電子機器（英会話・文字などの知能開発専用機器など）	週に３日以上	5.5	16.6	2.1	13.9
	家にない	72.4	23.6	90.7	11.1

※　「週３日以上」は、「ほとんど毎日」＋「週に３〜４日」の％
※　「週に１〜２日」「ごくたまに」「使わない・使わせない」の項目は表示していない
※　各国の「週に３日以上」の上位３位までの項目に①〜③と表示

幼児の家庭にあるであろうさまざまなものやメディアについてきいたところ、「家にない」割合が高い項目が多かったのはインドネシアで、「知育玩具（つみ木、ブロックなど）」、「タブレット端末」、「テレビゲーム」、「学習用電子機器」で５割を超えた。日本では「学習用電子機器」「テレビゲーム」が「家にない」の５割を超え、「タブレット端末」も49.0％でやや高い。

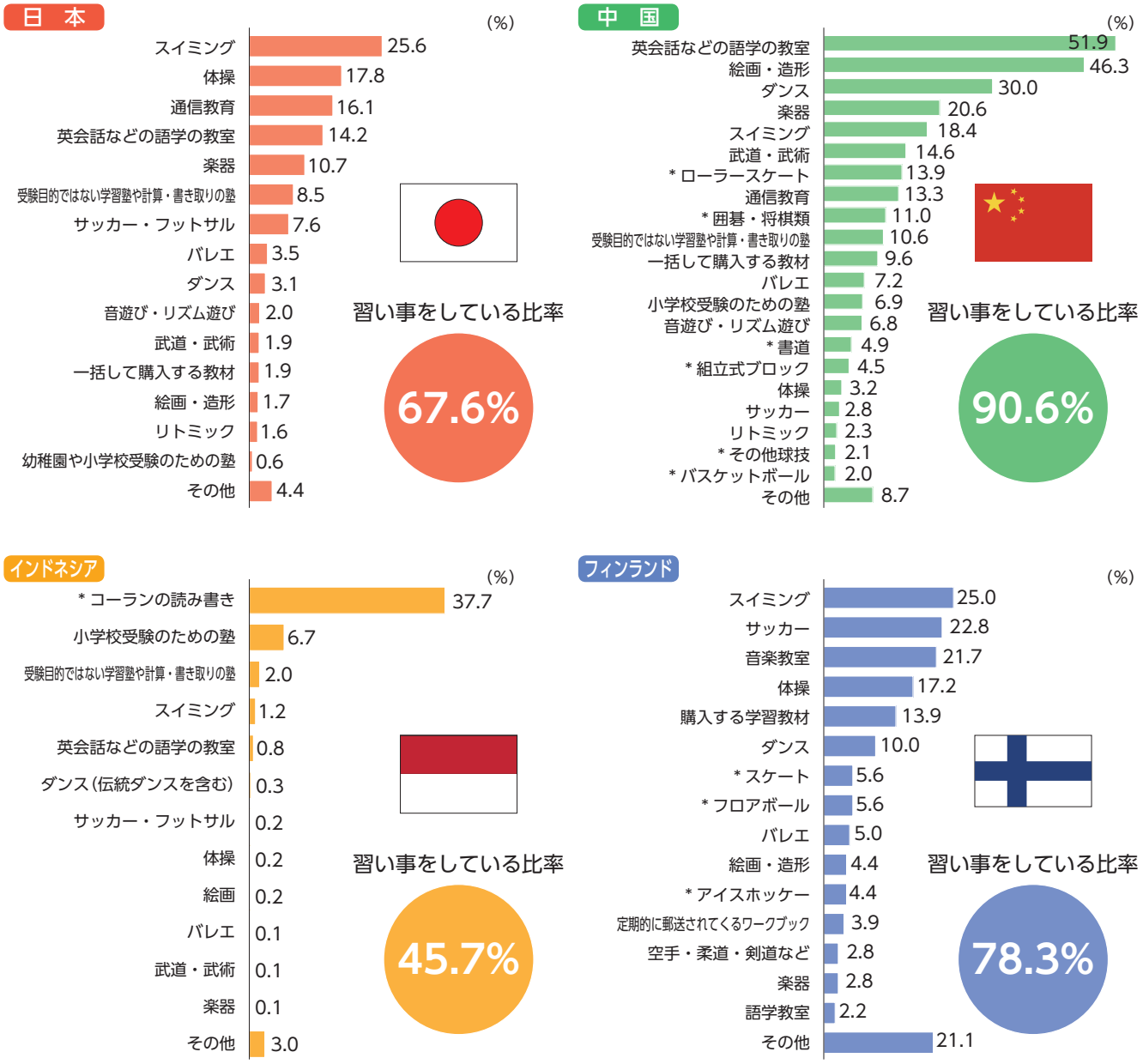
幼児の使用（視聴）頻度を見ると（週３日以上）、「テレビ」は中国を除いた３か国で９割以上と高く、次いで「絵本」はインドネシアを除く３か国で約６割弱〜７割を占めており、「テレビ」と「絵本」が幼児の身近なものであることがわかる。日本では「テレビ」「絵本」に次いで「ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー」（以下ビデオと表示）が高い。中国では「絵本」がもっとも高く、次いで「テレビ」、「知育玩具」の順である。インドネシアは、「テレビ」、「スマートフォン」、「ワーク」の順で、スマートフォンの使用頻度が63.7％と他の３か国に比べて高い。フィンランドは「テレビ」、「絵本」に次いで「知育玩具」と「タブレット端末」が続き、４か国のうち絵本の使用頻度がもっとも高くなっている。

1-3 習い事

習い事をしている比率は、中国がもっとも高く90.6%であり、もっとも低いのはインドネシアの45.7%である。習い事の内容は、いずれの国でも「スイミング」が上位5位までに入る。

Q 対象のお子様は、現在、習い事・おけいこ事をしていますか。幼稚園・保育園などで有料で習っているものも含めてお答えください。

図1−3−1 習い事



※ 複数回答
※ ＊は、各国で独自に設定した項目および「その他」に記入があった内容で、一定以上の比率だったもの
※ 「特にない」の項目は表示していない

習い事をしている比率は高い国から順に、中国90.6%、フィンランド78.3%、日本67.6%、インドネシア45.7%である。習い事の内容は、普及状況や文化や宗教、教育観の影響を受けて異なると考えられるが、いずれの国でも「スイミング」が上位5項目に入る（日本、フィンランドでは1位）。また中国の子どもの51.9%は、「英会話などの語学の教室」に通っている。子育て方針（P10）で、中国の母親は「外国語を学ぶこと」に「とても力を入れている」比率が他の国より高いこととも関連しているだろう。インドネシアでは「コーランの読み書き」が37.7%ともっとも高い。地域住民のボランティアが行うことが多いようである。

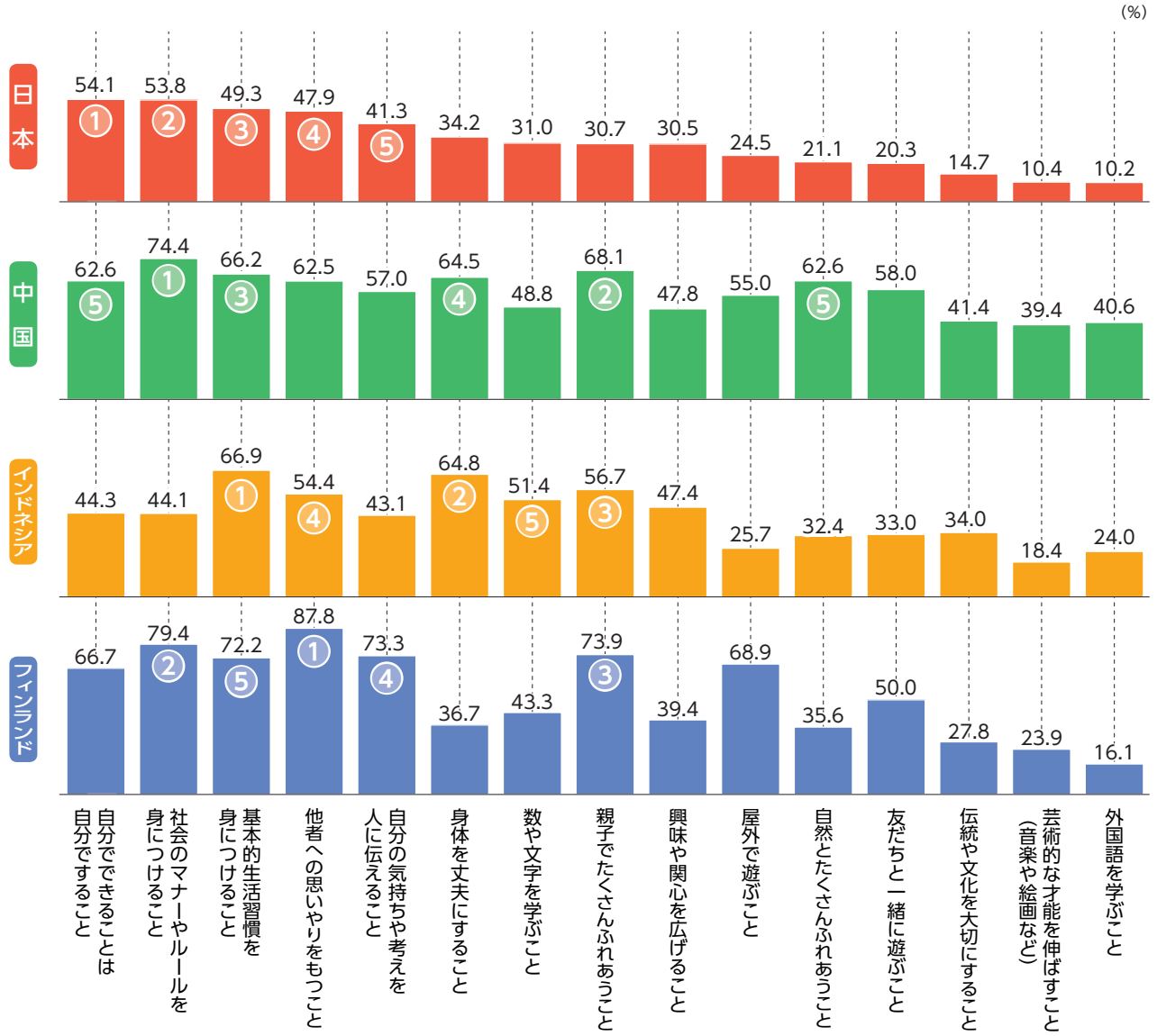
2 母親の教育・子育てについての意識

2-1 子育て方針

4か国ともに比率が高いのは「基本的生活習慣を身につけること」。日本は「自分でできることは自分すること」「社会のマナーやルールを身につけること」の順に比率が高く、5割を超える。

Q あなたは、どのようなことに力を入れてお子さまを育てていますか。

図2−1−1　子育て方針



※　「とても力を入れている」の%
※　日本の降順に表示
※　各国の上位5位までの項目に①〜⑤と表示

母親がどのようなことに力を入れて子どもを育てているかをきいたところ、4か国すべてで上位5項目以内に入ったのが「基本的生活習慣を身につけること」だった。日本では「自分でできることは自分すること」「社会のマナーやルールを身につけること」「基本的生活習慣を身につけること」の順であった。日本以外の3か国では、2位、3位に「親子でたくさんふれあうこと」が入っている。

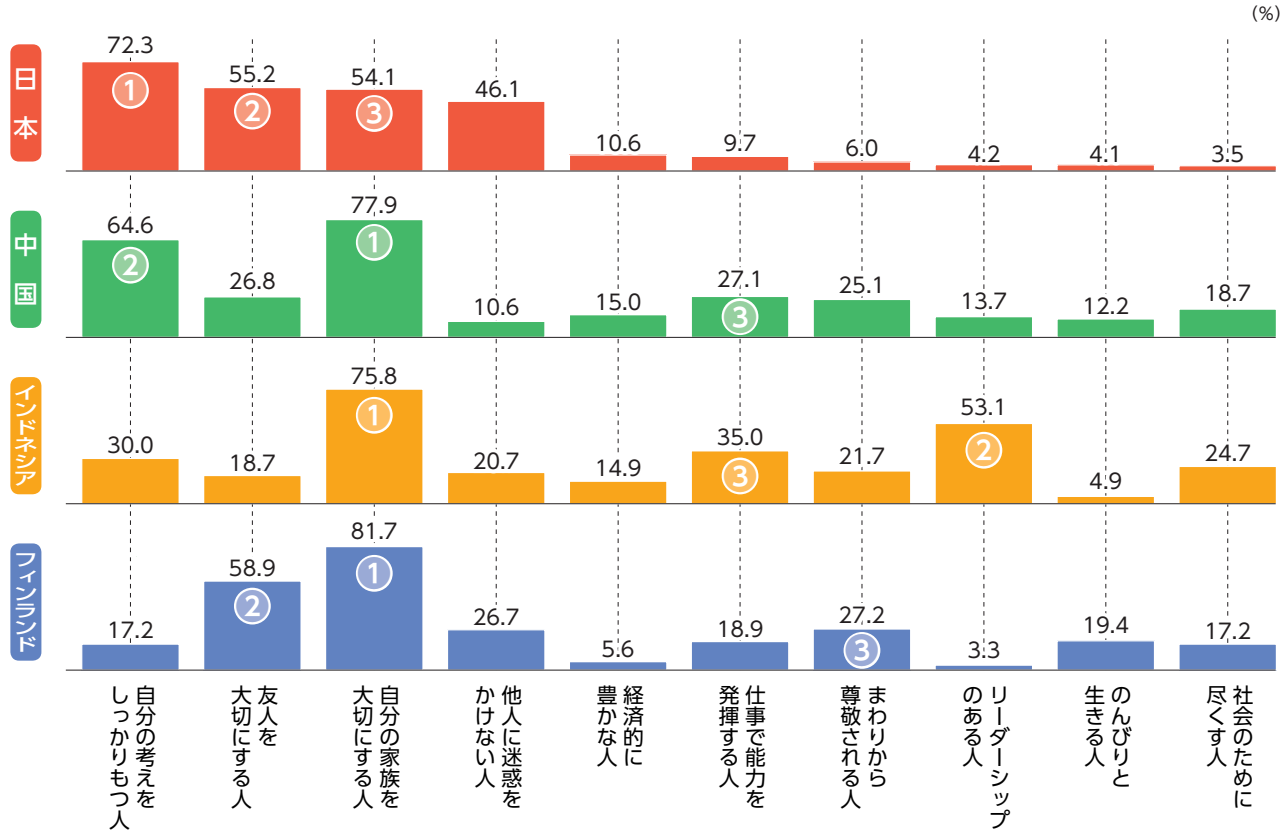
中国では「社会のマナーやルールを身につけること」がもっとも重視されている。インドネシアの1位は「基本的生活習慣を身につけること」で、2位に「身体を丈夫にすること」が入っている。フィンランドでは「他者への思いやりをもつこと」が1位である。「芸術的な才能を伸ばすこと」「外国語を学ぶこと」は中国で約4割だが、その他の国では1〜2割であった。

2-2 子どもの将来に対する期待

子どもの将来に対する期待について、日本では「自分の考えをしっかりもつ人」が72.3%ともっとも高い。進学期待では、日本は「四年制大学卒業まで」を選択する比率は高く、中国やインドネシアは大学院までの進学を望む比率が日本よりも高い。

Q 対象のお子様に、将来どのような人になってほしいと思いますか。3つまで選択してください。

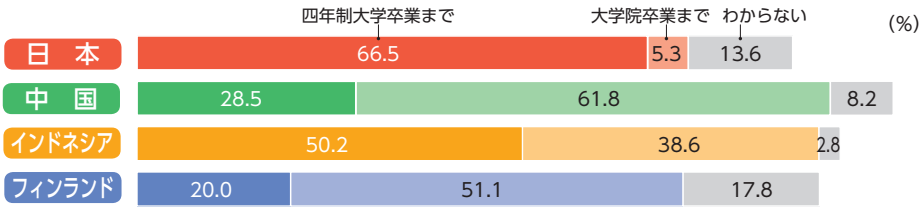
図2−2−1　子どもの将来に対する期待



※「あてはまるものはない」を含む11項目中3つまで選択　※ 日本の降順に表示　※ 各国の上位3位までの項目に①②③と表示

Q 現在、対象のお子様を、どの程度まで進学させたいとお考えですか。

図2−2−2　子どもの進学に対する期待



※「四年制大学卒業まで」「大学院卒業まで」「わからない」のみ表示
※「大学院卒業まで」について、日本は「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」、中国は「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」「大学院博士課程まで」、インドネシアは「大学院卒業まで(修士/博士)」としてたずねた。フィンランドは「短大・高等専門学校卒業まで」が「四年制大学卒レベル」、「四年制大学卒業まで」と「大学院卒業まで」が「大学院卒業レベル」であるため、他国に合わせて読み替えた。

子どもにどのような人になってほしいかについて、「あてはまるものはない」を含む11項目中3つまで選んでもらった。「自分の家族を大切にする人」はいずれの国でも選択される比率が高く、日本以外では1位となっている(図2-2-1)。日本は「自分の考えをしっかりもつ人」が72.3%で1位であり、他の国と比べても高い。また「他人に迷惑をかけない人」はフィンランド26.7%、インドネシア20.7%、中国10.6%であるのに比べると、日本は46.1%と他の国より高い。

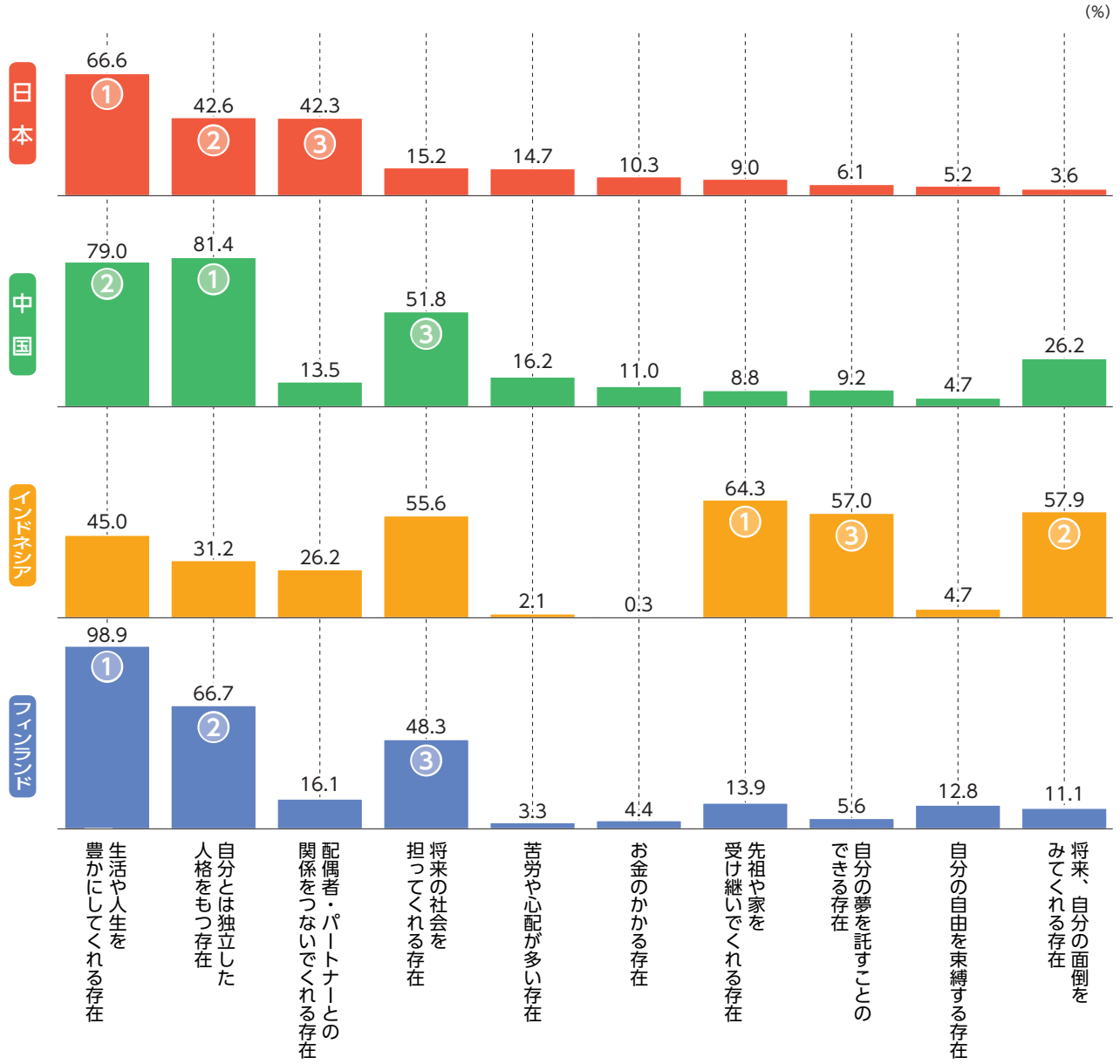
子どもの進学に対する期待は、日本は66.5%が「四年制大学卒業まで」であり、「大学院卒業まで」は5.3%と少数である(図2-2-2)。一方、中国では61.8%、インドネシアでは38.6%の母親が「大学院卒業まで」を選択している。学歴を重視する社会であることが影響していると考えられる。

2-3 子どもという存在

どの国の母親も、子どもをポジティブな存在としてとらえている。４か国中３か国で「生活や人生を豊かにしてくれる存在」「自分とは独立した人格をもつ存在」が上位１、２位を占めている。

Q あなたにとってお子様はどのような存在ですか。

図2−3−1　子どもという存在



※　複数回答　　※　日本の降順に表示
※　各国の上位3位までの項目に①②③と表示

母親にとって子どもはどのような存在なのだろうか。複数回答形式で、４か国すべてで上位５項目以内に入ったのが「生活や人生を豊かにしてくれる存在」「将来の社会を担ってくれる存在」だった。「苦労や心配が多い存在」「自分の自由を束縛する存在」といった否定的な回答は、いずれの国も２割を下回っていた。４か国の母親とも、子どもをポジティブな存在としてとらえている様子がうかがえる。

日本、中国、フィンランドは上位の項目が似ているが、インドネシアは少し異なっている。「先祖や家を受け継いでくれる存在」(64.3%)、「将来、自分の面倒をみてくれる存在」(57.9%)、「自分の夢を託すことのできる存在」(57.0%)、が上位に来ており、他の３か国の値よりも30ポイント以上高い。

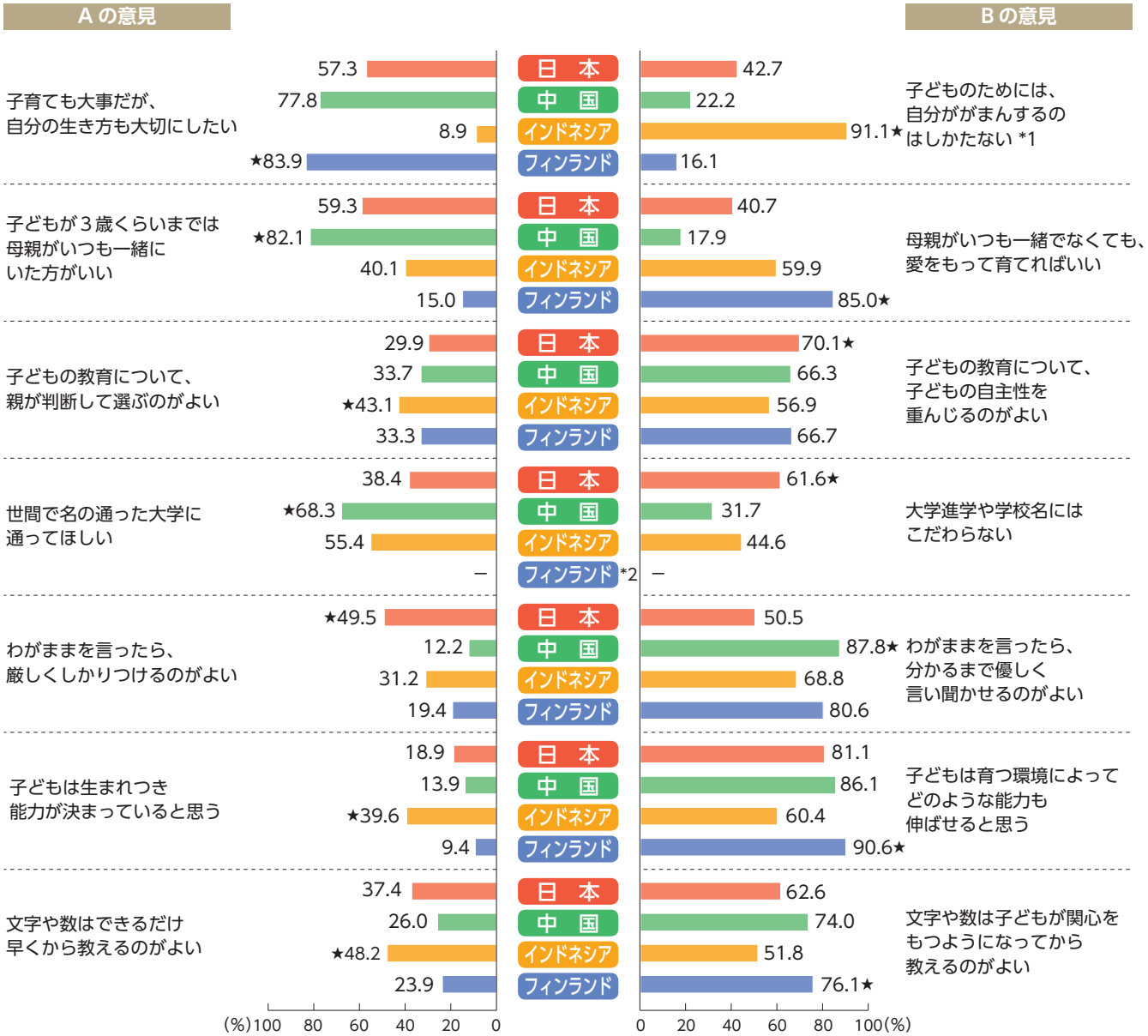
また、日本については「配偶者・パートナーとの関係をつないでくれる存在」の比率が他国よりも高く(42.3%)、「将来の社会を担ってくれる存在」の比率が他国より低い(15.2%)。

2-4 母親の子育て観

子育てと自分の生き方のバランスや子どもの教育に対する考えなどは、国によって大きく異なっている。日本は「子どもの自主性を重んじるのがよい」「大学進学や学校名にはこだわらない」などが他国よりも高い。

Q 子育てに関するAとBの２つの意見のうち、あなたのお気持ちに近い方はどちらですか。

図2−4−1　母親の子育て観



※　★印は各項目で4か国中もっとも高い数値
*1　インドネシアの事情に応じて異なる翻訳をしている
*2　フィンランドは聞いていない

大学進学について、「A.世間で名の通った大学に通ってほしい」か「B.大学進学や学校名にはこだわらない」のいずれかを選んでもらったところ（フィンランド以外の３か国）、Aを選択した比率は中国が最も高く（68.3％）、日本が最も低かった（38.4％）。また、子どもがわがままを言ったときのかかわりについて、「A.厳しくしかりつけるのがよい」か「B. 分かるまで優しく言い聞かせるのがよい」かを選んでもらったところ、Aの比率は日本がもっとも高く（49.5％）、他の３か国はいずれも１～３割程度と低かった。このように、子育て観は国によって異なっている項目が多いものの、「B. 子どもの教育について、子どもの自主性を重んじるのがよい」「B. わがままを言ったら、分かるまで優しく言い聞かせるのがよい」「B. 子どもは育つ環境によってどのような能力も伸ばせると思う」比率は４か国とも５割を超えている。

2-5 教育やしつけの情報源

4か国ともに高いのは、「配偶者・パートナー」と「園の先生」で、どの国も約4割以上の母親が選んでいる。日本だけが特に高い、または低い項目は見られなかった。

Q あなたは対象のお子様のしつけや教育についての情報をどこから（誰から）得ていますか。

表2−5−1　教育やしつけの情報源

(%)

		日本	中国	インドネシア	フィンランド
家族など	配偶者・パートナー	58.8	41.3	86.1	51.1
	あなたの親	46.0	23.1	54.4	41.7
	あなたのきょうだいや親戚	18.6	11.8	27.3	21.7
	配偶者・パートナーの親	16.6	9.6	27.6	11.1
	配偶者・パートナーのきょうだいや親戚	3.9	4.6	11.7	2.2
社会など	あなたの友人・知人	52.1	52.2	33.0	63.9
	園の先生	39.8	57.5	49.7	52.2
	子どもの習い事や教室の先生	17.7	30.7	9.1	1.7
	子育てサークルの仲間（日本）／育児を通して知り合った仲間*1	7.7	57.2	4.1	8.9
	教育の専門家*2	−	20.2	−	−
	病院の医師や看護師	7.0	8.7	1.2	6.7
	保健師や栄養士	3.9	4.0	0.8	1.7
	市区町村の子育てサービス窓口の人	2.8	1.2	3.3	25.6
	配偶者・パートナーの友人・知人	1.8	8.4	6.0	1.7
メディア	インターネットやブログ	32.3	25.9	16.4	48.9
	テレビ・ラジオ	19.2	16.5	18.4	7.8
	育児・教育雑誌	15.1	23.9	3.2	13.3
	育児書や教育書などの書籍	10.9	43.3	3.0	15.6
	ソーシャルメディア（Facebookなど）	8.4	58.8	6.4	12.8
	新聞	6.0	6.4	0.2	11.1
	その他	1.3	0.8	0.1	4.4
	特にない	8.5	0.9	0.2	8.3

※　複数回答
※　濃い網掛けは50%以上の項目
*1　各国の事情に応じて翻訳している。「育児を通して知り合った仲間（中国）」「子どもの学校などで知り合った仲間（インドネシア）」「地域の父親・母親仲間（フィンランド）」
*2　中国のみの項目

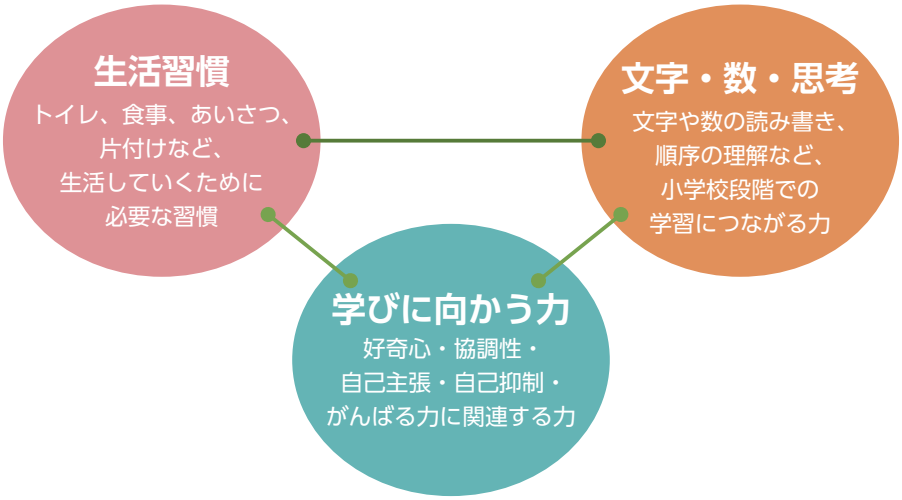
しつけや教育の情報源として、4か国ともに高い項目は、「配偶者・パートナー」「あなたの友人・知人」「園の先生」である。これらを選択している比率が約4割以上か、各国の上位4項目以内に入っている。

ただしもっとも高い項目は各国で異なり、日本が「配偶者・パートナー」（58.8%）、中国が「ソーシャルメディア」（58.8%）、インドネシアが「配偶者・パートナー」（86.1%）、フィンランドが「あなたの友人・知人」（63.9%）となっている。各国別にみると、中国は多様な分野から情報を得ている。インドネシアは家族を頼る比率が高く、メディアから情報を得る比率が低い。フィンランドは「インターネットやブログ」に加え、「園の先生」や「市区町村の子育てサービス窓口の人」（フィンランドには「ネウボラ」という制度がある）といった公共の人的資源の活用率が他国よりも高い。日本は他の国よりも目立って高い、または低い項目はみられなかった。

3 幼児期の「学びに向かう力」と母親のかかわり

3-1 幼児期にはぐくみたい３つの軸と「学びに向かう力」とは

ベネッセ教育総合研究所では、幼児期から小学校の学習生活に移行し、適応するために必要とされる力、幼児期に育てたい生涯にわたって必要な力として、《生活習慣》《学びに向かう力》《文字・数・思考》の３つの軸を置いている。幼児期から小学生にかけての縦断研究により、子どもの学びは、幼児期から小１期にかけて、《生活習慣》が土台となり、《学びに向かう力》と《文字・数・思考》が影響し合い、成長していくことがわかった[*1]。



本速報版では、《学びに向かう力》について取り上げる。

《学びに向かう力》は、多母集団同時分析による検証の結果、社会文化的な環境が異なる４か国で、共通の５領域、「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」で構成されることがわかった。

学びに向かう力

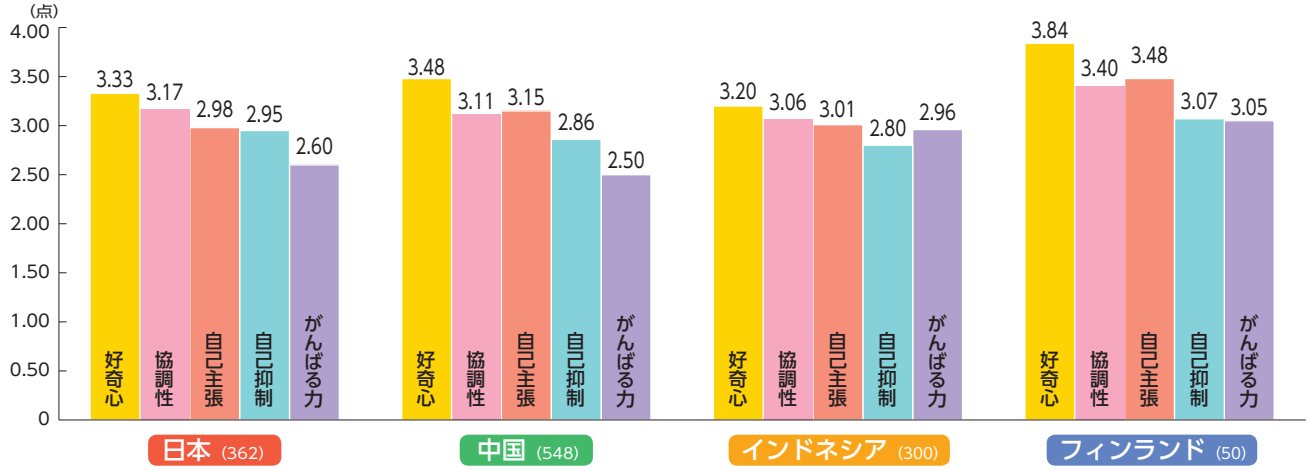
好奇心	・新しいことに好奇心をもてる ・好きなことに集中して遊べる ・工夫して遊べる ・わからないことについて「なぜ、どうして」など、まわりに質問ができる
協調性	・遊びなどで友だちと協力することができる ・人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる ・遊ぶとき、「入れて」「一緒に遊ぼう」「貸して」など友だちに声かけができる ・友だちとけんかしても、謝るなどして仲直りができる
自己主張	・自分が何をしたいかを言える ・ほしいもの、してほしいことを大人に頼める ・困ったことがあったら、まわりの人に助けを求めることができる ・友達からいやなことをされたら、「いや」「やめて」などと言える ・友達と意見が違っても、自分の意見を主張することができる
自己抑制	・人の話が終わるまで静かに聞ける ・ルールを守りながら遊べる ・遊びなどで順番が回ってくるまで待てる ・夢中になっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる ・遊びを中断されても、時間をおいて続けられる ・自分がやりたいと思っても、人のいやがることはがまんできる
がんばる力	・物事をあきらめずに挑戦することができる ・どんなことに対しても、自信をもって取り組める ・自分でしたいことがうまくいかないときでも、工夫して達成しようとすることができる ・一度始めたことは最後までやり通せる

*1　参照：ベネッセ教育総合研究所「幼児期から小学生の家庭教育調査」http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3684

3-2 学びに向かう力　各国の６歳児の状況

Q 現在、対象のお子様は以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。
（15ページに示した項目それぞれについてきいた。）

図3−2−1　《学びに向かう力》５領域の発達状況（６歳児）



※　得点の出し方：「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」の各項目において、“とてもあてはまる”を４点、“まああてはまる”を３点、”どちらともいえない“を２点、”あまりあてはまらない“を１点、”ぜんぜんあてはまらない“を０点として算出し、平均点を出した
※　6歳児の状況。（　　）内はサンプル数
※　分析にあたり、中国のデータについては、関連の設問に対して「無答不明」が生じたケースは全て除外し（リストワイズ削除）、2286件で分析している

《学びに向かう力》として定義した「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」は、それぞれについて４〜６項目の設問を用意し、「とてもあてはまる」〜「まったくあてはまらない」の５段階で母親に回答してもらった。各国とも、「好奇心」「協調性」「自己主張」の発達状況は、「自己抑制」「がんばる力」よりも、高めの傾向がみられる。

3-3 母親の養育態度の特徴

Q 日頃、対象のお子様と接している際、あなたは以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

表3−3−1　養育態度

（%）

		日本	中国	インドネシア	フィンランド
寄り添い型	子どもがやりたいことを尊重し、支援している	81.2	95.1	98.9	98.9
	どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている	68.3	85.8	97.9	94.5
	子どもに対して否定的ではなく、前向きで積極的な態度をとるように心がけている	58.0	84.0	83.5	95.5
	しかるとき、子どもの言い分を聞くようにしている	57.7	83.3	90.6	70.6
	子どもが自分でやろうとしているとき、手を出さずに最後までやらせるようにしている	66.6	85.7	90.4	94.4
保護型	私が一緒にいてあげないと、子どもは自分のことができないのではないかと心配になる	34.3	22.6	58.5	27.8
	子どもに対して過保護である	31.6	17.0	31.5	16.6
	子どもがしようとしていることすべてにわたってコントロールしようとしてしまう	25.8	18.3	60.8	5.5
	子どものことを、年齢より幼く扱うことが多い	20.1	14.9	27.6	10.0
	子どもを私に頼らせようとしている	10.0	13.1	26.4	1.1

※　「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の％
※　分析にあたり、中国のデータについては、関連の設問に対して「無答不明」が生じたケースは全て除外し（リストワイズ削除）、2286件で分析している。

母親の日頃の子どもへの接し方をみると、いずれの国も、子どもの気持ちに寄り添い、尊重するような態度で子どもに接している傾向がみられ、過保護で統制する接し方よりも強くなっている。**子どもの意思や感情を尊重する保護者のかかわりを「寄り添い型養育態度」と定義する。**

インドネシアでは、「私が一緒にいてあげないと、子どもは自分のことができないのではないかと心配になる」「子どもがしようとしていることすべてにわたってコントロールしようとしてしまう」という「保護型養育態度」の２項目について、６割前後が「あてはまる（とても＋まあ）」と回答している。

3-4 学びに向かう力と母親のかかわり

母親の「寄り添い型養育態度」は、子どもの「好奇心」「がんばる力」の育ちと関連がみられる。

寄り添い型養育態度

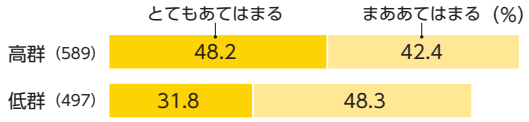
子どもが
やりたいことを尊重し、
支援している
等5項目

日本	中国	インドネシア	フィンランド
好奇心	好奇心	好奇心	好奇心
がんばる力	がんばる力		がんばる力

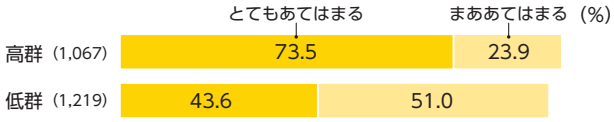
※　4～6歳のデータ。二変量相関分析により、中程度(0.2～0.4)のプラスの相関がみられた
※　「協調性」「自己主張」「自己抑制」は、国により関連性がみられる

「学びに向かう力」として定義した5領域のうち、各国でもっとも得点の高い「好奇心」と、得点の低い「がんばる力」を取り上げ、母親の「寄り添い型養育態度」との相関をみたところ、中程度の正の相関がみられた。

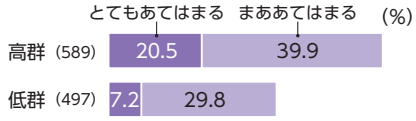
日本　好奇心　新しいことに好奇心をもてる



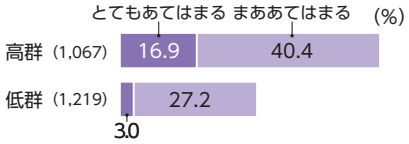
中国　好奇心　新しいことに好奇心をもてる



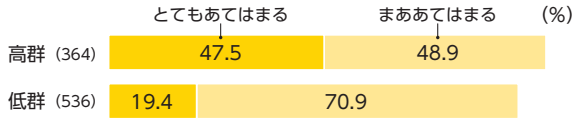
日本　がんばる力　物事をあきらめずに、挑戦することができる



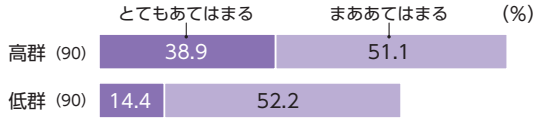
中国　がんばる力　物事をあきらめずに、挑戦することができる



インドネシア　好奇心　新しいことに好奇心をもてる



フィンランド　がんばる力　物事をあきらめずに、挑戦することができる



※　「寄り添い型養育態度」について、各国の得点で高群と低群に分けた
※　分析にあたり、中国のデータについては、関連の設問に対して「無答不明」が生じたケースは全て除外し(リストワイズ削除)、2286件で分析している

母親の「寄り添い型養育態度」を得点の高い群と低い群にわけ、子どもが「新しいことに好奇心をもてる」(「好奇心」の設問項目)、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」(「がんばる力」の設問項目)の関係をみると、母親が、寄り添い型のかかわりをしているほど、子どもは「新しいことに好奇心をもてる」(好奇心の項目)、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」(がんばる力の項目)の比率が高いことがわかった。

国際調査からみえる日本の母親の特徴

無藤　隆　白梅学園大学大学院特任教授

今回の調査結果のなかで、日本の母親の特徴についてまとめたいと思います。日本の母親の子育て意識としては、幼児期は自立を優先し、早期教育などは優先順位が低い傾向がみられます。「自分の考えをもつ」いう自立を大事にしつつ、友人や家族を大切にする人間に育てたいと考えています。その一方、他人に迷惑をかけない人になってほしい、という伝統的価値観が保持されており、社会や仕事への関心は比較的薄いようです。子どもを大事にし、独立した人格とする反面、家族への意味を強調する傾向が見て取れます。

「学びに向かう力」は、５つの因子が同時に伸びていくのではなく、「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」としての順番で伸びていく傾向が見られました。そして、母親の「寄り添い型養育態度」が「学びに向かう力」の成長と関連しています。この傾向は、日本以外の３か国でも同様にみられました。

他に、本速報版では割愛していますが、親子が一緒に遊ぶ活動が、子どもの「好奇心」とつながっています。また、母親が学びの環境を整備するような行動が、子どもの数の知識の獲得とつながっています。母親が子どもの思考を促すような姿勢が、子どもの「学びに向かう力」の成長と関連が高く、さらに、「分類」や「言葉」の力も促すようです。

まとめると、日本の親はかなりの多様性があります。幼児教育を子どもの自主性を伸ばすものとしてとらえているといえます。保護者の、子どもの意欲や自主性や思考を促す養育態度が「学びに向かう力」を伸ばすのかもしれません。ただし、数や文字の獲得は、保護者の養育態度自体よりは、それに向けた教材その他の環境整備が影響するようです。

今回、4か国の比較調査を行い、乳幼児を育てる親としての共通性が多く見られるとともに、文化とさらにその中の階層による違いが浮き出てきたように思われます。その時代による変化もおそらく背景にあるはずです。とりわけ、育児への意識や人間関係、またそこでの学びの道具やメディアや遊びのあり方などは変化が見えてきました。

幼児期の家庭教育についての国際調査が示すもの

榊原洋一　お茶の水女子大学名誉教授／チャイルド・リサーチ・ネット所長

今回の調査結果には大変興味あるいくつかの知見が含まれていると思いました。まず、子どもの「学びに向かう力」の構造が文化や歴史の異なる４か国でほぼ同様であったことは、家庭教育環境の普遍性を示しています。幼児教育の開発はグローバルな課題であることが証明されたと思います。

さらに、母親の「寄り添い型」の育児姿勢が、子どもの「学びに向かう力」を涵養していることが示されたことは、寄り添い型の幼児教育の実践を維持している日本の選択が正しかったことを裏書きするいわば溜飲の下がる結果でした。

その反面、いくつか気になる知見も得られました。子どもの存在の意味について、日本では「配偶者・パートナーとの関係をつないでくれる存在」と見なす回答が他国に比べて高く、逆に「将来の社会を担ってくれる存在」と見なす回答が最も低かったことは、日本の家庭のやや内向きな傾向を示しているように見えます。経済的発展の著しい中国やインドネシアだから、子どもを未来の社会の担い手と見なす傾向が高いともいえますが、既に成熟した経済状態を維持しているフィンランドにおいても、子どもを未来の社会の担い手として期待しているのです。世界一速いスピードで少子高齢化が進む日本で、子どもの社会的貢献を期待する回答が低いことは検討を有する課題ではないでしょうか。

また、子どもの生育環境において重要な位置を占めるメディア環境において、IoT化社会（Internet of Things；モノのインターネット）の新しいメディアであるタブレット端末の使用率が４か国中最も低かったことも課題です。米国ではタブレット端末などのデジタルメディアには、子どもの発達に資する可能性があることが示唆されていますが、タブレット端末の使用がフィンランドの３分の１しかないことは、STEM教育の重要さが強調される現代日本社会において憂うるべき事態といっても良いかもしれません。

STEM教育：Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Mathematics（数学）の４領域を重点的・統合的に考える教育。

幼児期の「学びに向かう力」と親の養育態度における文化差

荒牧美佐子　目白大学准教授

本調査の特長は、幼児期の親のかかわりと子どもの認知的・非認知的スキルの育ちとの関連について、これまで蓄積されてきた国内調査での知見をベースに、他国との比較を行った点にあります。国際比較を実施するにあたり、調査項目の選定は、各国の実態を捉える上で齟齬が生じないよう、それぞれの国の有識者に助言を仰ぎながら、慎重に行いました。しかしながら、得られた回答データを分析すると、日本では望ましいと考えられる親のかかわりが、他国においては必ずしもそうでなく、価値づけが異なる可能性が見えてきました。例えば、フィンランドでは、平日と休日などで生活リズムはあまり変えないそうで、幼児の生活においても、親がわざわざ早寝・早起きを心掛けるといった習慣がないようです。食事に関するマナーに求める厳格さや、子どもがスマートフォンやタブレット端末にどの程度接触しているかも国によって違いが見られました。

また、日本では多少、過干渉でネガティブであると思われるような子どもへのかかわりも、インドネシアでは、必ずしもそうだとは限らないようです。日本や中国、フィンランドでは、「寄り添い型養育態度」が子どもの「学びに向かう力」にポジティブな影響を与える可能性が示唆されましたが、インドネシアでは、「保護型養育態度」もまた、子どもの自己制御能力等との間にポジティブな関連があることが明らかになりました。

「学びに向かう力」の構成要素は、ある程度、各国共通であると言えそうですが、それらのスキルを伸ばすための親のかかわりについては、絶対的な望ましさや理想があるわけではありません。それぞれの文化的な背景に基づいた価値観等が、親の養育態度や子どもの発達にも影響していると言えるようです。

調査をふり返って

ベネッセ教育総合研究所
持田聖子

社会文化的環境を超えて共通する母親のかかわりと「学びに向かう力」

本調査の企画に賛同し、各国での調査の監修をお引き受け頂きました国内外の専門家諸氏、そして、多くの質問から成る調査に回答を頂いた、4か国の約4,900人のお母様たちに、まずは心からの感謝を申し上げます。グローバル化が進む社会において、社会文化的に異なる環境にある、いずれの国の家庭においても、幼児期からの「学びに向かう力」の育成が、子育てにおいて重要視され、その力の成長は、母親の子どもの意思を尊重し、寄り添うようなかかわり方と関連することは、貴重な知見と言えましょう。４か国の保護者や、幼児教育にかかわる方々にとって、本調査の知見が、よりよい幼児期の家庭教育を考える際の示唆となることを願っています。

4 有職の母親の育児環境

本章では、幼児期の保護者のワーク・ライフ・バランスについて、有職の母親を分析対象に、子どもと一緒に過ごす時間、家族の育児・家事の実態などについて取り上げます。

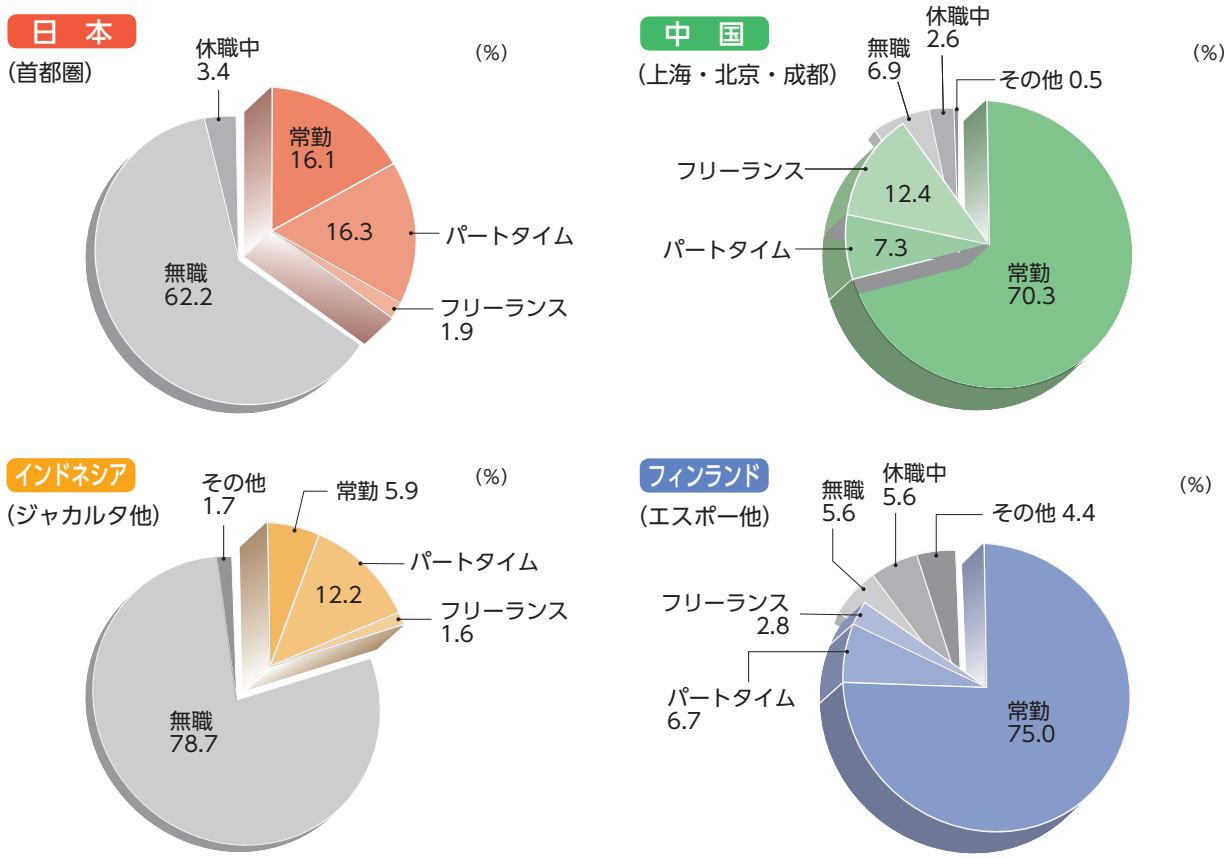
第４章の分析対象

・就業形態について、「常勤（フルタイム）」「パートタイム」「フリーランス（在宅ワーク・自営業含む）」と回答した母親

(人)

	日　本	中　国	インドネシア	フィンランド
分析対象数	373	2,480	177	152

●母親の就業形態



分析対象者の内、常勤（フルタイム）比率：日本 46.9%、中国 78.1%、インドネシア 29.9%、フィンランド 88.8%

- 父親に関するデータについては、有職母親のうち、有職の配偶者・パートナーがいる人の回答（日本：330人、中国：2,404人、 インドネシア：156人、フィンランド：129人）

●母親が同居している人（複数回答）

(%)

	日　本	中　国	インドネシア	フィンランド
対象の子	100.0	88.1	98.9	97.4
対象の子の兄弟	45.3	15.4	65.0	71.1
配偶者・パートナー	83.6	82.9	87.0	87.5
自分の父親	5.6	21.7	18.1	0.7
自分の母親	7.5	29.4	30.5	0.7
配偶者の父親	2.4	21.4	6.8	1.3
配偶者の母親	2.4	27.9	6.2	0.7
親せき	1.1	2.3	12.4	0.0
その他	0.0	1.7	0.0	2.0

※「自分の母親」、または「配偶者の母親」、または両方の母親と同居している比率

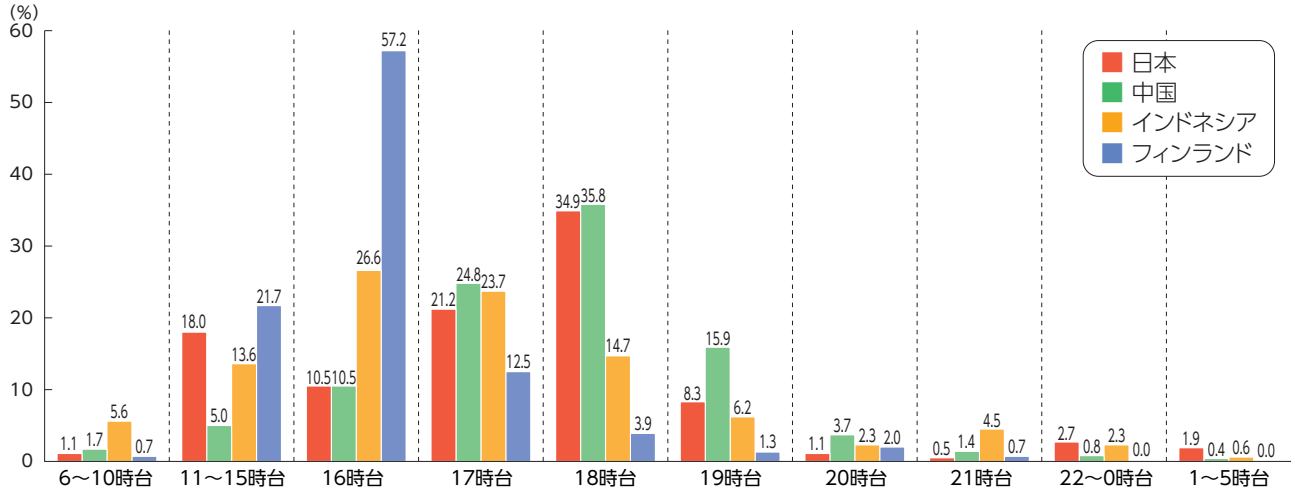
日　本	9.9%
中　国	54.5%
インドネシア	35.6%
フィンランド	0.7%

4-1 平日の帰宅時間

母親の平日の帰宅時間のピークは、日本と中国は「18時台」、インドネシアとフィンランドは「16時台」。父親の帰宅時間は、日本は「19時台」から「22～0時台」まで分散し、「22～0時台」がもっとも多い。中国は「18時台」、インドネシアは「19時台」、フィンランドは「16時台」がピーク。

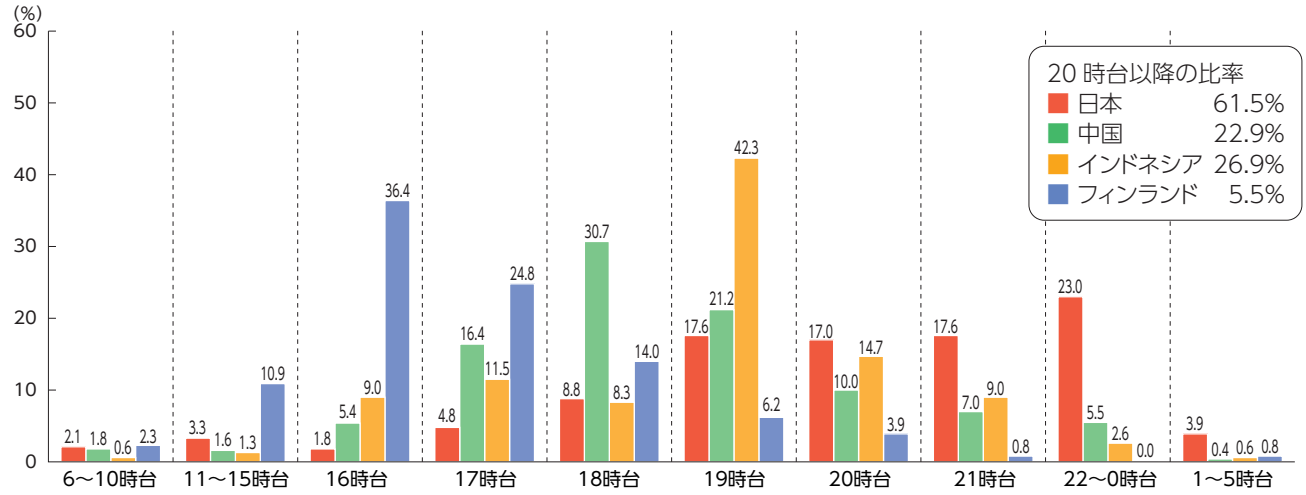
Q あなたは働いている日、平均して何時頃帰宅しますか。

図4－1－1　母親の帰宅時間



Q 配偶者・パートナーは働いている日、平均して何時頃帰宅しますか。

図4－1－2　父親の帰宅時間



各国の有職の母親の帰宅時間は、日本・中国は「18時台」がピーク、インドネシア・フィンランドは「16時台」がピークである。フルタイム比率が7割と高い中国が、もっとも帰宅時間が遅く、「18時台」35.8%、「19時台」15.9%である。日本は「17時台」と「18時台」が多い。フルタイム比率が3割と低いインドネシアは「16時台」と「17時台」が多い。フィンランドはフルタイム比率が8割強でもっとも高いが、帰宅は「16時台」に集中している。フィンランド調査監修者によると、勤務開始時刻・終業時刻が早いこと、保育園の閉園時間が早めであることが背景として考えられる。

父親の帰宅時間は、日本は「19時台」から「22～0時台」に分散し、「22時～0時台」23.0%がピーク、中国は「18時台」30.7%、インドネシアは「19時台」42.3%、フィンランドは「16時台」36.4%がピークである。インドネシアの都市部は、交通渋滞の影響で、通勤に時間がかかることが多い。日本の父親の帰宅時間は4か国の中で顕著に遅く、「20時台」以降の比率をみると、日本は6割強に対して、中国・インドネシアは2割、フィンランドは1割に満たない(5.5%)。

4-2 子どもと一緒に過ごす時間

父親が仕事のある日に子どもと過ごす時間は、日本では「１時間未満」が35.5%で、４か国中、もっとも短い。休日は、４か国とも母親の８割、父親の６割前後は「８時間以上」子どもと過ごしている（睡眠時間は除く）。

Q あなた／配偶者・パートナーは、対象のお子様とどのくらい一緒に過ごしていらっしゃいますか。

図4－2－1　子どもと一緒に過ごす時間：仕事のある日（平日）

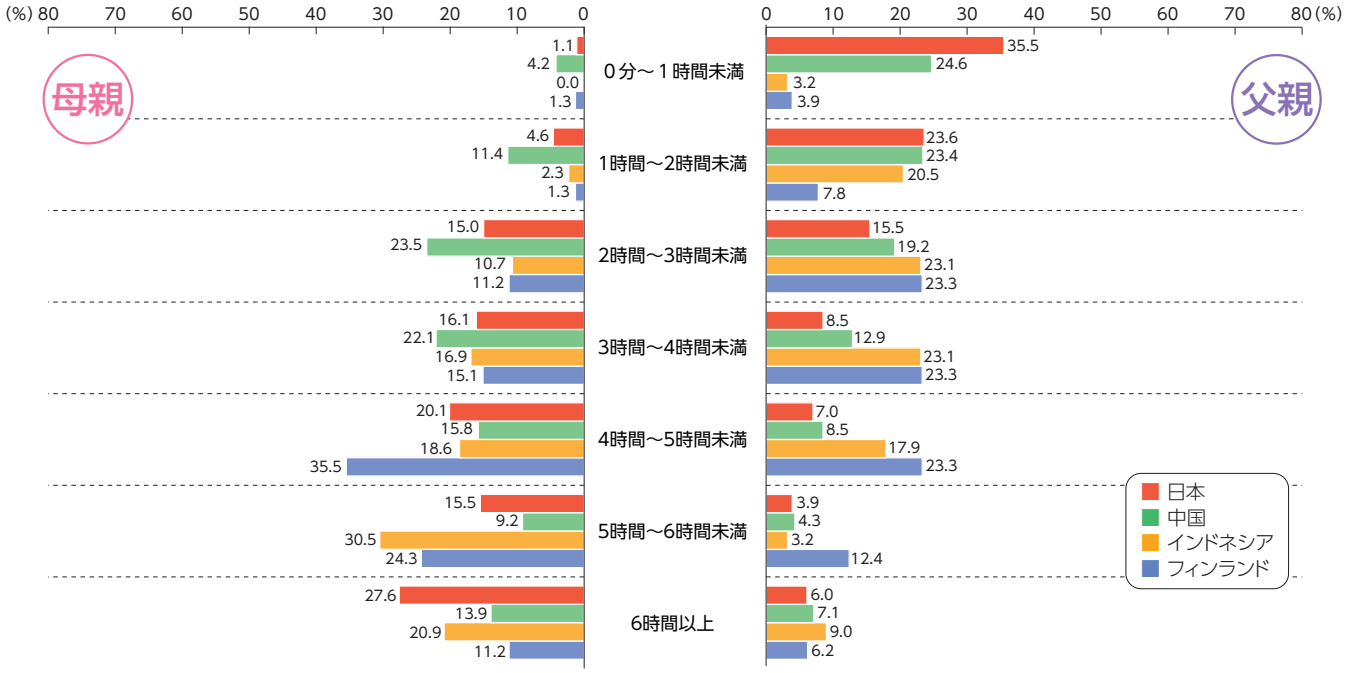
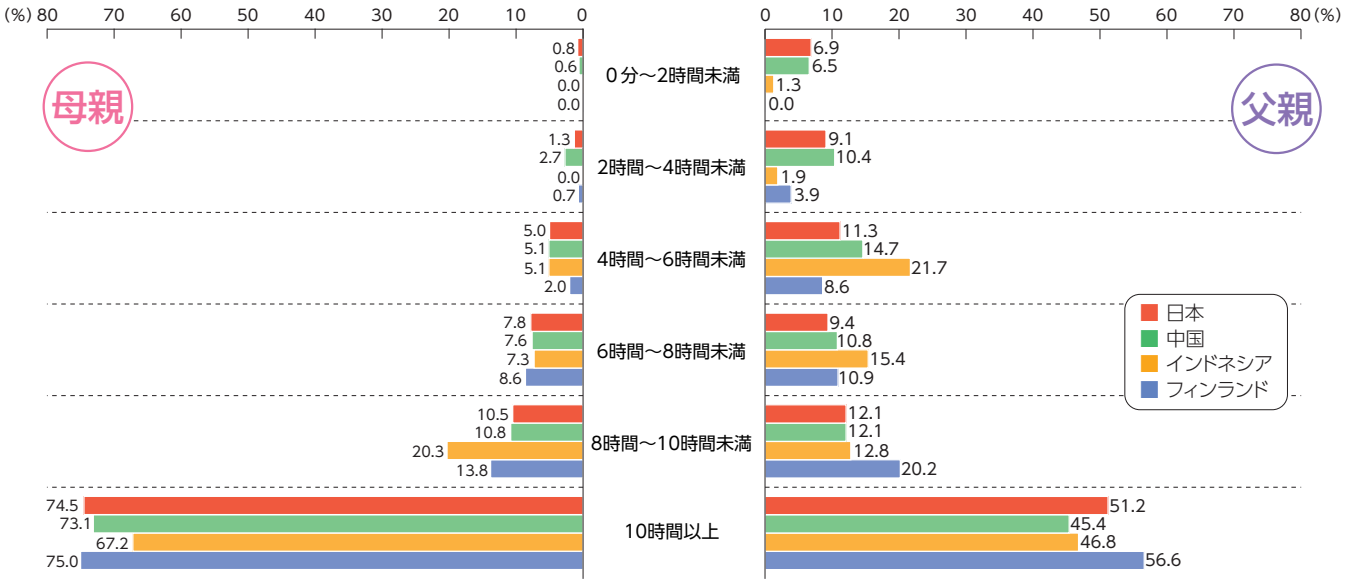


図4－2－2　子どもと一緒に過ごす時間：休日



※ 睡眠時間を除く。

仕事のある日（平日）に子どもと一緒に過ごす時間は、４か国とも、父親より母親の方が長い傾向にある。日本の母親は、「２時間～３時間未満」から「６時間以上」に分散している（図４－２－１）。パートタイムやフリーランスの母親が「６時間以上」と長い傾向にある（図表省略）。父親については、日本・中国の父親は、インドネシア・フィンランドの父親と比べて、子どもと一緒に過ごす時間が短く、「２時間未満」が日本は59.1%、中国は48.0%である。日本・中国の父親について、帰宅時間別にみると、「20時台以降」に帰宅する場合、日本の51.3%、中国の52.3%は、子どもと一緒に過ごす時間が「０分～１時間未満」である（図表省略）。休日は、４か国とも、母親の６～７割、父親の４～５割は「10時間以上」子どもと過ごしている。

4-3 父親の育児・家事頻度

育児・家事ともに日常的にかかわる比率が４か国でもっとも高いのはフィンランドの父親。日本の父親は、「食事の後片付け」「ごみ出し」「洗濯」など、帰宅時間が遅くても取り組める家事にかかわっている。

Q 配偶者・パートナーは、家事や、対象のお子様の育児について、どれくらいしていますか。

育児の頻度

図4−3−1 子どもと一緒に外で遊ぶ

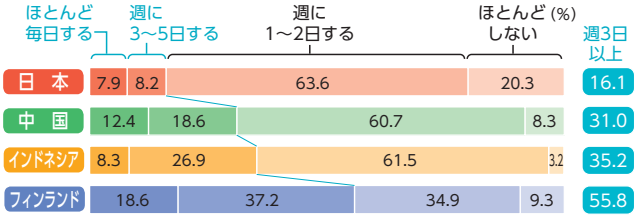


図4−3−2 子どもと一緒に室内で遊ぶ

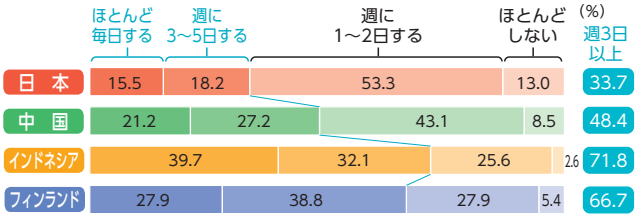


図4−3−3 子どもを叱ったり、ほめたりする

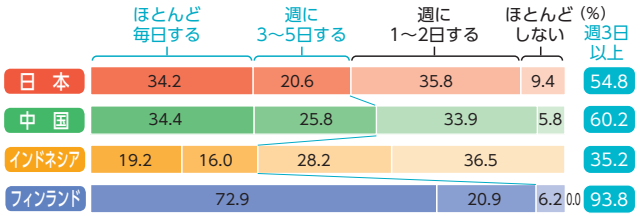
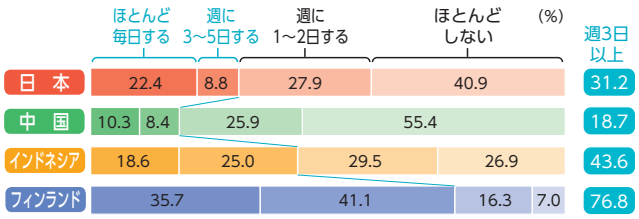


図4−3−4 子どもを寝かしつける



家事の頻度

図4−3−5 食事のしたくをする

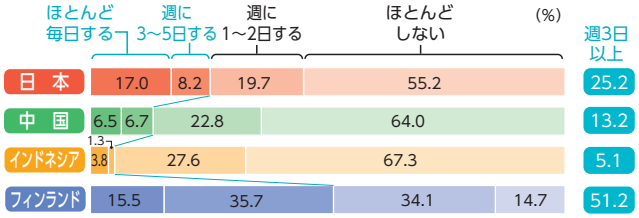


図4−3−6 食事の後片付けをする

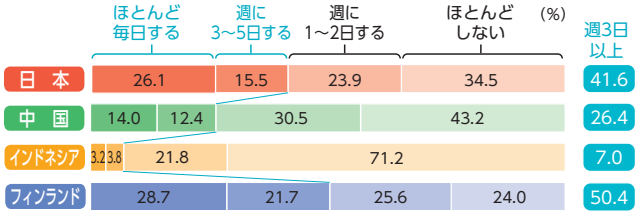


図4−3−7 ごみを出す

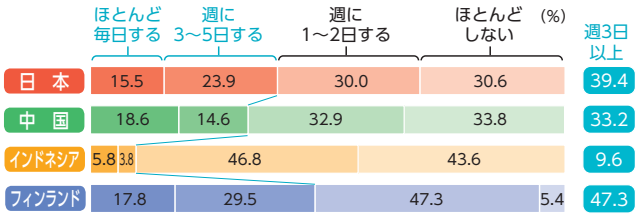
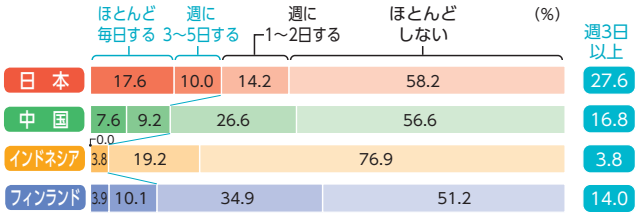


図4−3−8 洗濯をする



父親の育児・家事頻度について、帰宅時間がもっとも遅い日本の父親は、「週３日以上」の比率でみると、子どもとの遊びにかかわる頻度は、４か国の中でもっとも低い。一方、帰宅時間がもっとも早いフィンランドの父親は、子どもとの遊びは５〜６割、寝かしつけは７割以上と比率が高い。幼児の就寝時刻は、各国とも21時前後であり(P.7図１−１−２)、育児は帰宅時間が遅いと、平日にかかわることが難しいと考えられる。

家事については、日本の父親は、「食事のしたくをする」「食事の後片付けをする」「ごみを出す」については、フィンランドの父親についで、「週３日以上」の比率が高い。「洗濯をする」については、もっとも比率が高い。日常的に行う家事の中でも、食事の後片付けや、ごみ出し、洗濯は、帰宅時間が遅くても取り組める家事であるため、日本の父親もかかわっていることがうかがえる。インドネシアの父親は、帰宅時間は日本より早いが、家事にかかわる頻度が４か国の中でももっとも低い傾向である。

4-4 祖父母の協力

中国は、祖父母との同居率が高く（19ページ参照）、６割前後の母親が、「家事」「幼稚園・保育園などの送り迎え」「子どもを預かってもらうこと」について、祖父母の協力を得ることが「よくある」と回答。日本は、各項目について、「よくある」１割、「ときどき」１～３割で、「ときどき」協力を得る方が多い。

Q 次のことについて、対象のお子様の祖父母に協力してもらうことはどれくらいありますか。

図4－4－1　家事

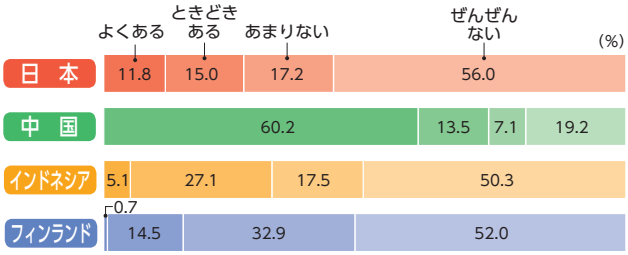
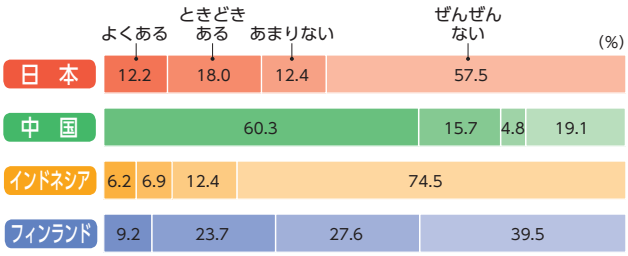


図4－4－2　幼稚園・保育園などの送り迎え



※　就園者の母親のみ回答。

図4－4－3　子どもを預かってもらうこと

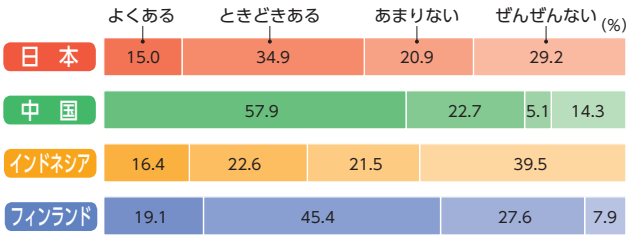
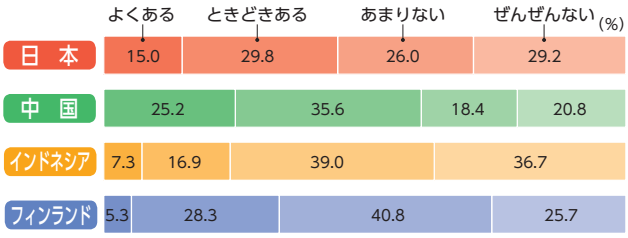


図4－4－4　子どものことに関する相談



※　祖父母がいない場合は「ぜんぜんない」を選択。

図4－4－5　子どもにかかる費用の援助

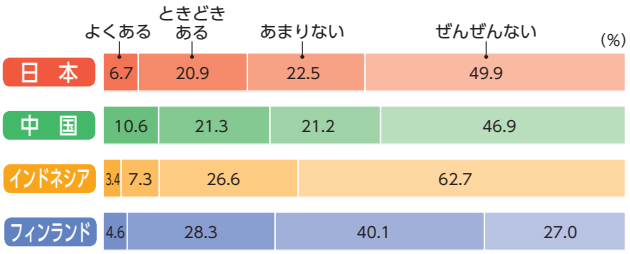


表4－4－1　母親の帰宅時間と祖父母の協力（日本・中国）

(%)

日本		17時台	18時台	19時台以降
家事	よくある	11.4	13.8	18.5
	ときどきある	10.1	13.8	18.5
	よく＋ときどき	21.5	27.6	37.0
幼稚園・保育園などの送り迎え	よくある	9.0	15.6	17.6
	ときどきある	11.5	18.0	19.6
	よく＋ときどき	20.5	33.6	37.2
子どもを預かってもらうこと	よくある	10.1	14.6	24.1
	ときどきある	38.0	33.1	27.8
	よく＋ときどき	48.1	47.7	51.9

中国		17時台	18時台	19時台以降
家事	よくある	59.2	68.8	74.3
	ときどきある	14.9	12.4	10.0
	よく＋ときどき	74.1	81.2	84.3
幼稚園・保育園などの送り迎え	よくある	58.7	73.1	77.4
	ときどきある	18.4	12.3	11.0
	よく＋ときどき	77.1	85.4	88.4
子どもを預かってもらうこと	よくある	54.1	69.5	74.5
	ときどきある	27.7	18.8	15.9
	よく＋ときどき	81.8	88.3	90.4

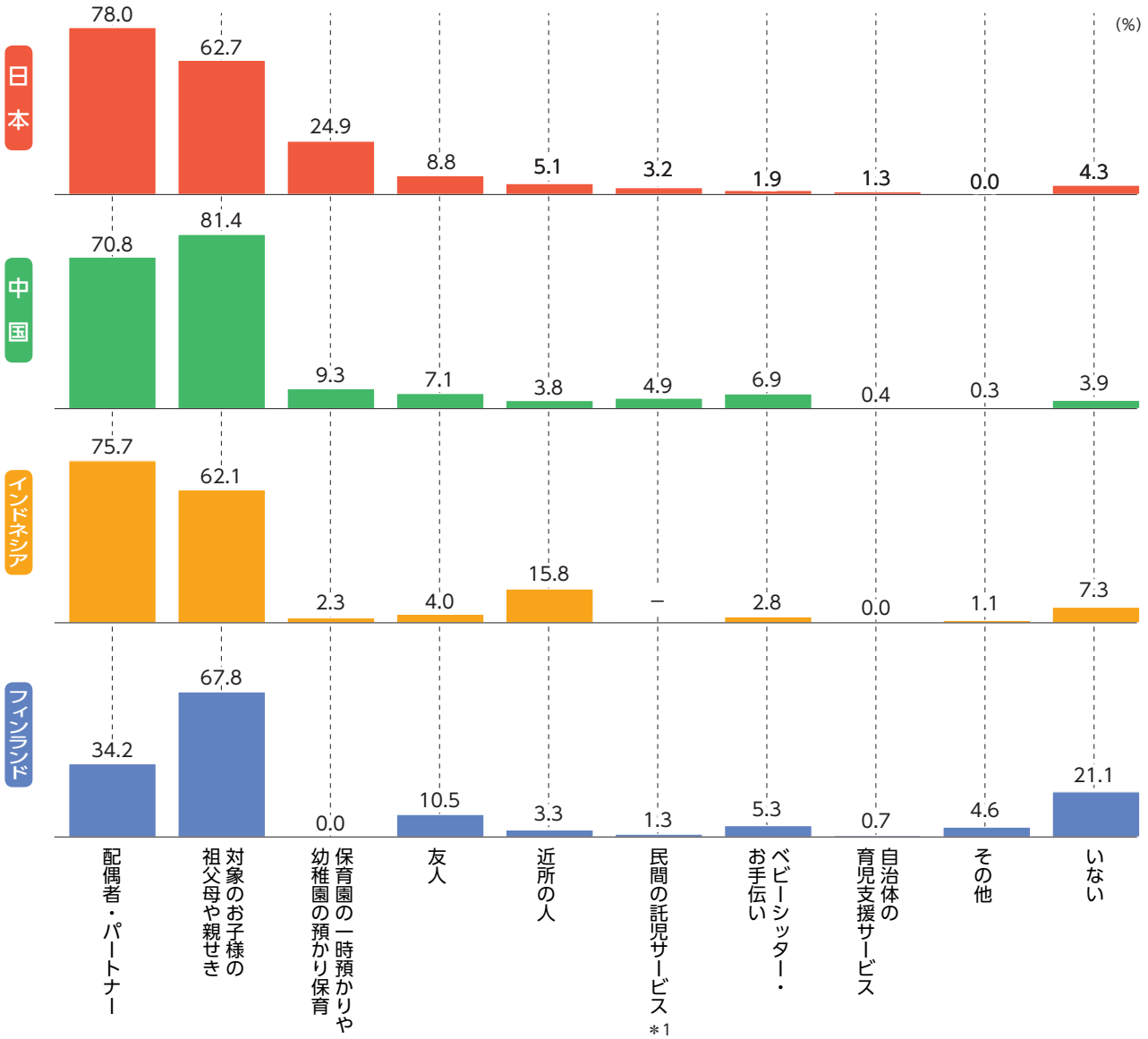
祖父母の協力については、「家事」、「幼稚園・保育園などの送り迎え」、「子どもを預かってもらうこと」について、中国の比率が顕著に高く、「よくある」比率は約６割である。中国は母親の帰宅時間が遅くなると、祖父母の協力も多くなる（表４－４－１）。日本は祖母との同居率は１割と低く、園の送迎や子どもを預かることについて、祖父母の支援を「ときどき」受ける比率の方が高い。「子どものことに関する相談」は、中国についで高い。インドネシアは、全般的に、祖父母の協力を得る頻度が低い。フィンランドは、子どもの預かりについて、祖父母の協力を得る比率が中国についで高いが、フィンランド調査監修者によれば、保育園の夏季休業時や、配偶者・パートナーと出かける時などに、祖父母の協力を得ているようである。

4-5 母親以外の子育ての担い手

４か国とも、「配偶者」はフィンランドを除き７割、「対象のお子様の祖父母や親せき」は６～８割が子育てを担う。家族以外では、日本は「保育園の一時預かりや幼稚園の預かり保育」24.9%、インドネシアは「近所の人」15.8%、フィンランドは「友人」10.5%。フィンランドは「いない」が21.1%。

Q あなた以外で、対象のお子様の面倒を見る人、機関、サービスはいますか（ありますか）。

図4−5−1　母親以外の子育ての担い手



※　複数回答
＊1　インドネシアは「民間の託児サービス」についてはきいていない。

母親以外の子育ての担い手について、複数回答できいたところ、４か国とも「対象のお子様の祖父母や親せき」が６割以上で、中国はもっとも高く、81.4%である。「配偶者・パートナー」は、日本・中国・インドネシアは７割以上だが、フィンランドは、本設問では34.2%と低い。しかし、実際はフィンランドの父親は日常的に育児に取り組んでいる（P.22参照）。フィンランド調査監修者によると、フィンランドでは、父親の育児参画は当然という意識があること、両親が離別した場合も子どもの養育は共に担うことから、本設問では、離別した子どもの父親として選択した可能性が考えられる。家族以外の子育ての担い手は、各国の特徴がみられる。日本は園の一時預かり制度を利用（24.9%）、インドネシアは近所の人も子育てに協力（15.8%）、フィンランドは、友人（10.5%）と習い事の送迎などを分担するなどで協力しあうようである（フィンランド調査監修者より）。

4-6 有職の母親の生活に関する満足度

子育て、家事、仕事、仕事と家庭生活のバランス、現在の生活全般において、日本の有職母親の満足度は４か国の中で顕著に低い傾向。日本は、父親が「食事の後片付け」「ごみ捨て」「洗濯」などの家事に取り組む頻度が高いほど、母親の「仕事と家庭生活のバランス」満足度が高い。

Q あなたの現在の生活について、それぞれお答えください。

図4−6−1　自分の子育てについて満足している

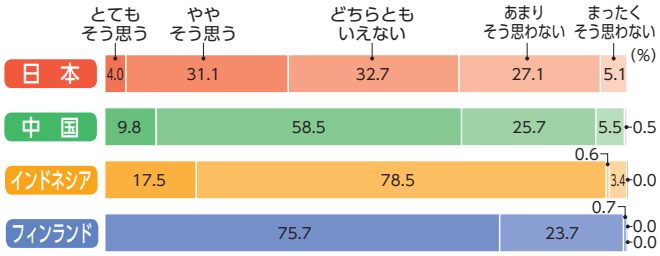


図4−6−2　自分の家事について満足している

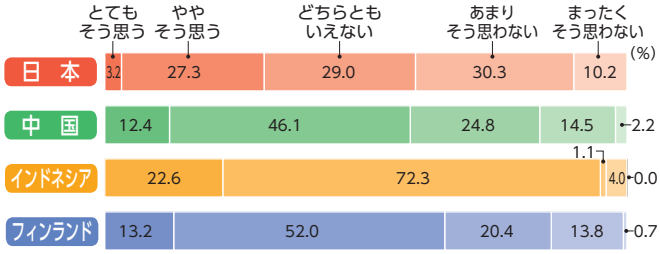


図4−6−3　現在の仕事について満足している

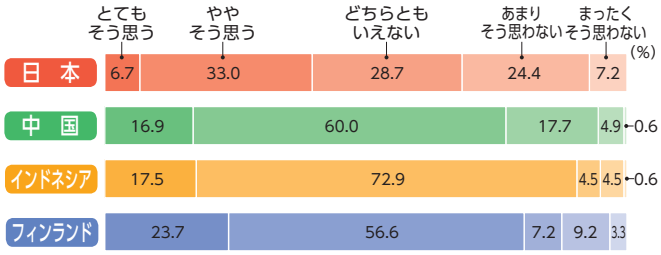


図4−6−4　仕事と家庭生活のバランスに満足している

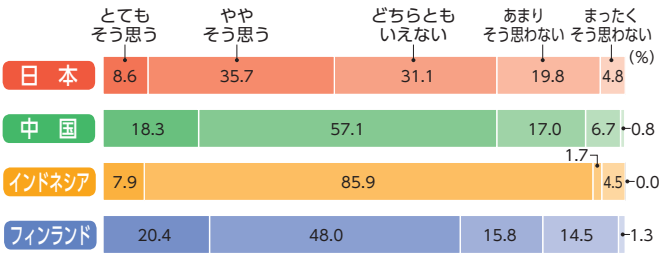


図4−6−5　現在の生活全般について満足している

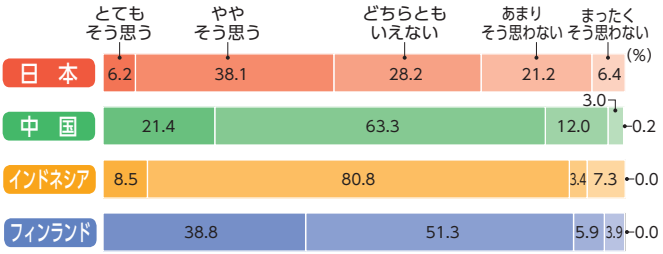
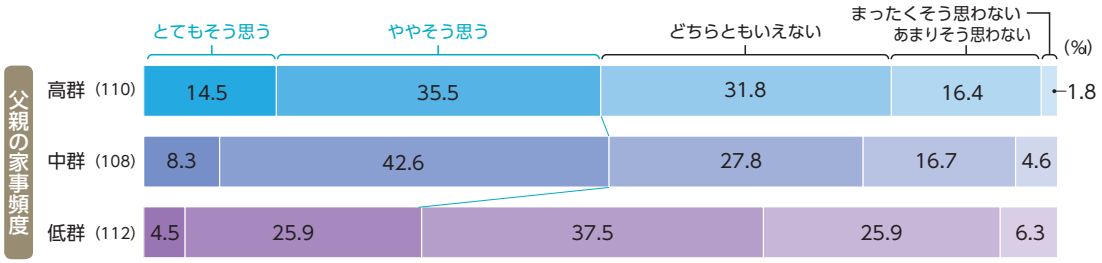


図4−6−6　父親の家事頻度と母親の仕事と家庭生活のバランス満足度（日本）



※　父親の家事頻度得点…「食事の後片づけをする」「ごみを出す」「洗濯をする」の３項目について、「ほとんど毎日する」を４点、「週に３〜５日する」を３点、「週に１〜２日する」を２点、「ほとんどしない」を１点として算出し、平均点を出した。平均点を均等な分布になるように３分割し、「高群」「中群」「低群」とした。

日本の母親は、子育て、家事、仕事、仕事と家庭生活のバランス、生活全体の満足度が、４か国の中で顕著に低い。「とても」「まあ」の比率でみると、多くの項目で、インドネシアとフィンランドの母親の満足度が高い。

日本の母親の仕事と家庭生活のバランス満足度について、父親が「食事の後片付け」「ごみ出し」「洗濯」など、帰宅時間が遅くても取り組める家事に取り組む頻度が高い場合、母親の満足度がより高い結果がみられた。帰宅時間が遅い日本の父親が、平日の育児や、食事づくりなどに取り組むことが難しい場合も、家事に取り組むことで、母親の仕事と家庭生活のバランスを支えていることがうかがえる。

チーム育児がワーク・ライフ・バランス満足度を高める

秋田喜代美　東京大学大学院教育学研究科教授

日本の母親のワーク・ライフ・バランス満足度は、４か国中で一番低く、しかもその結果が顕著であることが見えてきました。国際比較を通して日本の課題が改めて浮き彫りになったと言えるでしょう。中国の母親の方が帰宅時間は日本よりも遅い。けれども、中国では祖父母同居率が高く、母親の育児・家事が祖父母に支えられていることが分かります。そして日本の父親も、予想通り帰宅時間が４か国中で一番遅いこと、しかし、その中でもできる家事や育児に協力しようとしている前向き姿勢の父親の存在も見えてきました。「父親が家族の一員として取り組める家事に取り組むほど母親の満足度が高い」という結果は、育児・家事を夫婦がチームで担い支え合うことが母親の満足度を高めることを意味しています。また、日本では園の一時預かりなどの活用も他国に比べて高いことも見えてきています。つまり、賢く地域の子育ての支援を活用していくこと、またそうした仕組みを行政が創っていくことの必要性も見えてきます。母親を育児・家事で孤立させず、夫婦や親族、そして地域の皆で分担しながら、チームで育児・家事にあたることが、母親のワーク・ライフ・バランスの満足度を高めていくために大切と言うことができます。この母親のワーク・ライフ・バランスの満足度が、父親にとっても子どもにとっても満足感や雰囲気のよい親密な関係を生み出していくであろうことが予想できます。

また、ワーク・ライフ・バランスを考える時には、当然のことながら、母親だけではなく父親側にも目を向ける必要があります。そのためには、まず子育て時期の会社からの帰宅時間について、このような国際比較データをもとにして社会全体で考えていくことがとても大事だと思います。生産性や効率的な働き方が問われます。また父親と母親のワーク・ライフ・バランスの満足度がともに高まるためには、それぞれが、どのような姿を、それぞれにとって望ましい家事・育児・仕事の分担だと考えているのかを、夫婦間で対話しておくことも大事だと思います。また、子どもが小さい時期と少し大きくなってから等、長期的にどのようにワークとライフのバランスを考えていくのか、それに近い姿を実現するために夫婦だけではなく、どのようにしてさまざまなアウトソーシングや、親族、友人、地域のサポートを活用できるかの情報を得ていくことも大事だといえるでしょう。それによって、育児・家事の充実と同時に、個人の幸せや満足の実現だけでなく、家族全員の幸せや満足も高めていけるように考えることが大事だと思われます。

中国の幼児の母親のワーク・ライフ・バランスを考える

一見真理子　国立教育政策研究所　総括研究官

昨年来、日本でも公開され、評判を呼んでいるドキュメンタリー映画「いのちのはじまり―子育てが未来をつくる」（2016年、ブラジル・エステラ＝ヘネル監督）を見ました。国連児童基金（UNICEF）も共同出資しているその作品は、乳幼児が親・養育者とともに過ごす時間がいかに大切かを、エビデンスを通して、またリアルな現場取材から訴えるものでした。ちなみに、世界９か国からの子育て最前線の例として東アジアから唯一選ばれたのが中国、しかも父母以上に育児に本腰を入れて夢を託す素朴な祖父母の姿でした。このことを念頭に、今回の結果を見てみたいと思います。

調査対象国のうち、中国の有職母親の６割近くは「自分もしくは配偶者の父母」と同居しており、母親の８割以上が日常の子育ての担い手として「祖父母・親せき」を挙げています。子どもの祖父母世代との同居率、子育てへの依存率ともに、断然トップの数値です。母親たちは1980年以降に生まれた一人っ子世代で、その祖父母世代も「隔世育児」に励む様子がうかがえます。なお、有職母親でわが子と同居していない率が最も高いのも中国（12%）で、祖父母・親戚が母親に代わって子育てしていることがうかがわれます。

さらに、中国の有職母親の帰宅時間は、調査対象国の中では遅めで子どもと一緒に過ごす時間は最短との結果が出ました。短い時間に母親として何に注力するのかといえば、周囲のサポートがあるだけに、生活面の世話ではなく、子どもの教育に関する情報収集やしつけ・知育のかかわりにどうやら焦点化しているようです。彼女たちは生育過程においても、他者の面倒をみることよりも自分の知的成長や学業・仕事への傾注を促されてきたといってよいでしょうから、得意な分野で子育てにかかわっているようです。

一方、幼児の祖母世代はといえば、社会主義計画経済から市場経済への移行期に都市部のフルタイム就労者だったとすれば、多くは産休・育休明けから、わが子を家族やベビーシッター、託児所・幼児園に託して職業生活を走り抜け、55歳かそれ以前に定年を迎えていることが考えられます。まだまだ元気な退職後にようやく自分の手で育児をするチャンスがまわってきて、それが第二の人生の喜びになることもよく言われています。冒頭の映画で「祖父母にも役割がある」と強調するのに中国を取材したことは、以上からもうなずけます。

なお祖父母のみの育児の問題点や、母親自身が子どもとともに過ごすことの重要性は、よく専門家などから指摘されるようになり、母親自身は、育児を他者任せにすることに無自覚ではいられなくなっています。しかし、厳しい競争社会の中で社会参加している母親には、育児への専心は容易にできない現実であり、そのことは、「有職母親の子育て意識」のアンビバレントな回答にも表れているようです[注1]。

最後に、母親の心理的な安定にもつながる夫（父親）の家事・育児への参加ですが、2005年の「東アジア５都市　幼児の生活調査」[注2]、2010年の「東アジア４都市 乳幼児の父親調査」[注3]では、中国の父親の生活は日本と比べてゆとりがあることが、帰宅時間の早さ、家事や育児にかける時間、妻との日常的なパートナーシップなどを例に指摘されました。しかし今回の調査からは、中国の父親の帰宅時間も以前よりも遅くなり、子どものとの接触時間が減っていること、母親同様、家事と子どもの生活面の世話は、便利家電や祖父母に任せ、しつけ・遊びなどの面で役割を果たしている傾向が読み取れました。

親集団の世代交代や情報通信技術の急速な進化などによる就労状況の変化などが、育児をめぐる母親のワーク・ライフ・バランスにも変化をもたらしていること、しかしながら次世代育成に異世代で協力分担して取り組む中国の「生育文化」の伝統は、時代が変化しても息づいていることの双方が見えました。

注１.「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」か「母親がいつも一緒でなくても、愛をもって育てればいい」の２択を問う設問で、中国の有職母親の８割が「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」を選択。
注２.注３. ベネッセ教育総合研究所で実施。

「働き方改革」で、母親・父親が共に育児もできる帰宅時間の実現が望まれる

ベネッセ教育総合研究所　持田聖子

日本の労働者の労働時間の長さと、それが子育てへの参画に及ぼす影響は、少子化の課題のひとつになっています。本調査でも、日本（首都圏）の働く母親、父親の帰宅時間は、４か国の中で遅い傾向にありました。その結果、特に、父親が仕事のある日、子どもと一緒に過ごす時間は、もっとも短く、育児への取り組み頻度も、他国と比較して低い傾向にありました。一方、日本の父親が「食事の後片づけ」、「洗濯」、「ごみ出し」といった家事を「週３日以上」行う頻度は、帰宅時間がもっとも早いフィンランドの父親についで高く、特に「洗濯」は４か国の中でも、もっとも高い結果でした。これらの家事は、帰宅時間が遅くても取り組める家事といえます。中国のように祖父母の日常的な協力を十分に得ていない日本（首都圏）の働く母親は、帰宅後、子どもの育児を中心的に担い、父親は、帰宅時間に縛られない家事を担っていることがうかがわれます。

母親のワーク・ライフ・バランス満足度は、４か国の中では日本がもっとも低い結果となりました。満足度の低さには様々な要因が考えられますが、今回の調査結果からは、父親の家事頻度が高い場合、母親の満足度はより高くなる傾向がみられました。

「働き方改革」により、今後、日本の父親が、より早く帰宅できるようになり、家事だけでなく、もっと子どもと一緒に過ごし、育児にも、母親と共にかかわれるような環境づくりが望まれます。本調査が、共働き化が進む日本の家庭において、母親と父親が共に家事・育児を担うバランスを考えるヒントになることを願っています。

インドネシアにおけるワーク・ライフ・バランス

Sofia Hartati
Dean, Faculty of Education, State University of Jakarta

「幼児期の家庭教育国際調査」の結果から私が結論づけたのは、調査対象となった4か国の中では、インドネシアの女性は仕事や子育てへの満足度が比較的高いということだ。これは、母親が子どもと一緒に過ごす時間、家事をこなす時間、仕事から帰る時間、父親や他の家族による支援などに関するデータの要素と関係している。インドネシアにおける有職の母親の傾向は、今回の資料が示す結果と基本的には同じである。つまり、女性は家庭と仕事のどちらに対しても高い満足を感じている。これは、インドネシアの文化には、女性は家事をこなし、子育てをして、よく父親の世話もする女性像であるべきだという教えがあるからである。

家庭内での父親の家事分担については、インドネシアにおいて、掃除、皿洗い、洗濯、ごみ捨て、食事の準備などを男性が行うことは一般的ではない。インドネシアでは、男性は家族を養う生活費・収入をもたらす大黒柱であるべきだという考えがあるため、家事は母親が担当している。しかし時代の変化により、女性も良い主婦というだけでなく、家族の経済状態を改善するために仕事に就いて働くという選択肢を選ばなくてはならなくなっている。本来の文化とこの時代変化によって、インドネシアの女性は仕事と家庭という二種類の責務をこなさなくてはいけなくなっているのだ。

ジャカルタの有職の母親は父親よりも早く帰宅するが、それは食事の準備、子どもの世話などの家事があるためである。一方で、父親の帰宅が母親より遅いのは、家族のためにより多くの収入を得なくてはならないからだ。父親の帰宅時には、母親がほとんどの家事を終わらせており、父親は残った家事の一部を多少手伝うだけである。

平日、親が子ども達と一緒に過ごすのは朝食時(6時から7時)と帰宅(16時)してから子どもが寝る(21時頃)までの時間であり、通常は約5～6時間になる。休日には子どもと一緒の時間は長くなるが、その一方で、時には親が子どもと一緒にいる以外の活動を行う場合もある。母親が家族のために買い物する場合もあれば、父親が収入増を目的として副業を行う場合もあるし、室内で休息をとることもあるだろう。しかし基本的には休日には家族で過ごすことには変わりない。

子育てにおいて、近所の人々の社会的役割はインドネシアでは大きな影響を持つ。インドネシアは、親切で心優しく、お互い喜んで助け合おうという文化を持つ国であり、両親が仕事でいない間、近所に暮らす家族の子ども達が一緒に遊ぶのは頻繁に見られる光景だ。子どもは一人で遊ぶことはあまりなく、近所に住む少なくとも2、3人以上で集まって遊ぶことが多い。

祖父母の役割は、金銭的支援よりもむしろ子どもの面倒をみること、家事を分担することにある。インドネシアでは、子どもがすでに結婚もして働いている場合は、親からの財政的な援助を受けることはない。もちろんそれは祖父母の経済状態にもよるので、もし祖父母の経済状態が子ども世代より豊かであるとなれば、金銭的にも実際の手助けとしても支援することもありうる。反対に、祖父母の経済状況が苦しい場合は、子ども世代が親に定期的な金銭の支援を行う。祖父母の世話をする人がいる場合、祖父母は自分達の自宅で暮らしていることが多い。もし世話ができる人がいない場合には、結婚した娘との同居が多い。文化的にも、また宗教の教えとしても、子どもは親を軽視してはならない、子どもは親を尊敬し大切にしなくてはならないとされている。なぜ娘の家族との同居を選択するのか。その理由としては、娘は息子より多くの家事を担当し、家庭での用事をより多くこなさなくてはならないため、家は女性が所有しているものといえるからだ。このため母親が働く場合には、母親側の両親が子どもの面倒を見るのがインドネシアの家庭では一般的であり、それが信頼もできて安心だとみなされている。

「幼児期の家庭教育国際調査」のインドネシアデータが示す通り、インドネシアの女性が家庭と仕事に対して高い満足度を持っているというのは、正確な結果であると思う。今後の展望としては、インドネシアでの子育てに対する祖父母の役割、コミュニティの役割に関する調査を提案したい。

フィンランドにおける未就学児を持つ家庭生活についての考察

Risto Hotulainen, Associate Professor(left) / Sirkku Kupiainen, Special Adviser(right)
Centre for Educational Assessment, University of Helsinki

「幼児期の家庭教育国際調査」には、フィンランドの子どもと家族の生活について、注目すべき比較結果が示されている。同調査では、子育て慣習および家庭生活に影響を及ぼしている要因について、フィンランドと調査対象のアジア諸国との間に興味深い文化的差異があることも分かった。

同調査は子どもを保育所とプレスクールに預けている母親だけを対象にしたものだが、フィンランドデータにおけるフルタイム勤務の母親の比率は日本のほぼ2倍であり、インドネシアと比較した場合には3倍も高い。フルタイム勤務比率については、中国のみがフィンランドと同等であった(78%対89%)。一方で、フルタイム勤務の父親の比率はどの国でもほぼ同等であった。フィンランドと日本の母親の違いについての理由の1つに、同じフルタイム勤務であっても、フィンランドでは5人中4人の母親が午後5時前に帰宅できるという点が挙げられる。一方、日本では、午後5時以降にしか帰宅できない母親が数多くおり、しかもそのほとんどはさらに1時間以上遅い帰宅となる。父親については、フィンランドでは半数以上の父親が午後5時前には帰宅している。フィンランドと日本の父親の比較においては、この帰宅時間のギャップがもっとも大きいものだ。

このように、フィンランドの労働環境が労働時間の長さにおいて日本と大いに異なるのは明白である。結果、フィンランドの親たちは子どもたちとより長い時間を一緒に過ごすことができる。労働時間の短さは、家庭生活に関連した他要因にも反映されている。フィンランドでは、祖父母との同居はほとんど見られず、定期的に外部の保育者を必要とする家庭はほとんどない。その代わり、片方の親が子どもを保育所に連れて行き、もう片方が迎えに行くなど、役割を分担することで、互いの勤務時間を短縮することなく、また子どもを保育所に預ける時間を延長したりもせずに子育てを行っている。ほとんどの保育所は午後5時に閉まるため、親たちは子どもたちを迎えに行かないわけにはいかない。加えて、子どもも親も最後の一人になりたくないという気持ちがある。以上のことが、フィンランドの親たちが(父母ともに)アジア諸国と比較して子どもたちとより長く一緒の時間を過ごす理由と思われる。

家庭生活における祖父母の役割もフィンランドと調査対象のアジア諸国の間では異なるようだ。祖父母が近居の場合は、放課後の課外活動などに子どもたちを連れて行く時などに、両親の助けになることもあるだろうが、毎日のように祖父母を頼る親はほとんどいない。代わりに、サッカーの練習などの習いごとに連れて行く際には、他の子どもたちの親たちと協力しあうのが一般的だ。だがそうはいっても大部分の親は祖父母の存在を高く評価している。学校や保育所の長期休暇中、働く両親の代わりとして、祖父母が保育者としての役割を果たすことがよくあるからだ。

アジア諸国と比べて、フィンランドの親たち(父親含む)は 明らかに自分の子どもたちと過ごす時間が長い。またアジア諸国と異なり、屋外活動の時間も長い。フィンランドにおけるこの『屋外』活動には、バルコニーや中庭で赤ちゃんを乳母車に乗せたまま眠らせたりすることも含まれており、気温が氷点下となる冬でも同じように過ごすほど、小さい頃から野外活動は重視されている。この屋外活動は、保育所の日々のスケジュールでも大きな役割を演じている。

同調査では、家事や子どもに関係する多くの活動に関してフィンランドの母親と父親が相対的な平等関係にあることも明らかにされている。しかし他諸国と同様に、母親は特に家事において主たる負担がかかっているようだ。この結果はフィンランドの家庭における不完全な男女平等を示した国家研究の結果を裏付けている。

同様に、母親の全体的な生活満足度に関する調査結果は、初期のフィンランド比較研究も裏付けている。たとえ小さな子どもを持つ親が仕事と子育ての両立に大変さを感じたとしても、一般的なフィンランド国民および子どもを持つ親たちは、自分たちの生活に非常に満足している。このことがおそらく(国と自治体からの財政援助もあり)、多くの西欧諸国と比べてフィンランドの母親が家で子どもと過ごす時間が長い傾向にある理由なのだろう。この点は、保育所に子どもを預けている母親を対象とした現在の調査ではカバーされていない部分である。

調査企画・分析・協力者一覧

●全体および日本調査監修

無藤 隆（白梅学園大学大学院特任教授）

秋田 喜代美（東京大学大学院教授）

一見 真理子（国立教育政策研究所総括研究官）

榊原 洋一（お茶の水女子大学名誉教授／チャイルド・リサーチ・ネット所長）

荒牧 美佐子（目白大学准教授）

◆設計・分析

木村 治生（ベネッセ教育総合研究所主席研究員）
高岡 純子（ベネッセ教育総合研究所主席研究員）
持田 聖子（ベネッセ教育総合研究所主任研究員）
真田 美恵子（ベネッセ教育総合研究所主任研究員）
久保木 有希子（ベネッセ教育総合研究所研究員～2017年度）
田村 徳子（ベネッセ教育総合研究所特任研究員）

◆協力

劉 愛萍（チャイルド・リサーチ・ネット主任研究員）
小川 淳子（チャイルド・リサーチ・ネット研究員）
大内 初枝（ベネッセ教育総合研究所）

●中国調査監修・協力

朱 家雄（華東師範大学名誉教授）
周 念麗（華東師範大学教授）
張 燕（北京師範大学教授）
石山 基（上海児童時代倍楽生文化発展有限公司・総経理）
于 莉（上海児童時代倍楽生文化発展有限公司教育研究部・部長）
鄧 瑩華（上海児童時代倍楽生文化発展有限公司教育研究部・研究員）
金子 尚子

●インドネシア調査監修・協力

Sofia Hartati (Dean, Faculty of Education, State University of Jakarta)
服部 美奈（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授）
Gilang Yudhistira Suryadimulya, M.A. （名古屋大学大学院教育発達科学研究科社会・生涯教育学研究室（D3））
El Amanda de Yurie Arrafajr Suryadimulya （名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

●フィンランド調査監修・協力

Risto Hotulainen (Associate Professor, Centre for Educational Assessment, University of Helsinki)
Sirkku Kupiainen (Special Adviser, Centre for Educational Assessment, University of Helsinki)
下村 有子

※所属・肩書きは、発刊時のものです。

● 本調査結果の引用・転載や、関連調査については、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトにてご確認ください。

http://berd.benesse.jp/

● 中国・インドネシア・フィンランドでの園訪問・家庭訪問調査については、チャイルド・リサーチ・ネット内「世界の幼児教育レポート」をご覧ください。

http://www.blog.crn.or.jp/lab/01/

幼児期の家庭教育国際調査－４か国の保護者を対象に－
発　行　日：2018年8月1日
発　行　人：谷山 和成
編　集　人：高岡 純子
発　行　所：㈱ベネッセ コーポレーション　ベネッセ教育総合研究所
東京都多摩市落合１－34
企画・制作：持田聖子・久保木有希子
編集・デザイン：㈱ジー・アンド・ピー
表紙デザイン：但馬あやの

©ベネッセ教育総合研究所／無断転載を禁じます。
6TT005-2